【令和４年３月２７日印刷】

最後まで戦い抜いた第十八軍の作戦と
まだ沢山残っている遺骨

堀江　正夫

序　章　はじめに

第一章　物凄いニューギニアでの第 18 軍の作戦

Ⅰ．何故ニューギニアで陸上作戦が行われるようになったのか

Ⅱ．３年間も他にない苦労を味わった、その苦労とは

Ⅲ．最後の最後まで全軍済正と戦い抜いた実態は

Ⅳ．終戦

Ⅴ．過酷な状況下で長期間に亘り整然と戦うことが出来たのはどうしてか

第二章　遺骨収集

Ⅰ．これまでの遺骨収集

1. 戦後間もないころの対遺族施策

2. 吉田内閣の行った遺族対策

3. 海外渡航開始による帰還戦友と遺族有志による現地慰霊

4. 昭和 40 年代初期の遺骨収集に関する政府の姿勢

5. 昭和 44 年の遺骨収集

6. 全国遺骨収集推進団体協議会の発足

7. 政府計画による継続的な遺骨収集

8. 現地事前調査制度の実施

9. 平成 28 年「遺骨収集は政府の責任」とする法律の制定

10. その後の遺骨収集

最終章　終わりにあたり

序章　はじめに

日米両国間で長く続いた交渉は、最終的に米国の両国通商条約の破棄通告により、日本も交渉による解決を断念し、昭和 16 年 12 月 8 日大東亜戦争を開始した。翌１７年 1 月南海支隊と海軍陸戦隊は連合艦隊司令部のトラック島南部の重要拠点ラバウルを占領したが、当日夜から昼となく夜となく爆撃を受け、我又反撃したが及ばず、遂に第１章①に記した経過を経て 17 年 7 月陸上部隊によるポートモレスビー攻略に踏切り、従来考えても見なかった全く未知のニューギニア本島に南海支隊を投入したのである。

爾後、11 月末に第 18 軍司令部が編成され、その前後日本攻略のマッカーサー軍も本戦線に参加してきたのである。

ニューギニア本島は日本の南方 5 千ｋｍ、頭を左に向けた亀の形の世界第 2 位の大きな島であり、その東半分が第１次大戦後豪州がドイツから譲り受けて委任統治していて、広さは日本と同じで人口は６０万人であった。

ラエとマダン等は独豪時代統治の拠点としてやや近代化の面影があったものの、全般的には原始時代を彷彿とする未開の蕃地に等しく、住民は原始的生活を営んでいたのである。

大本営は、18 年初頭から第 51 師団・第 20 師団・第 4 師団を基幹とする兵力を投入し、爾後終戦に至る迄この兵力で、圧倒的な陸海空軍を擁するマッカーサーの連合軍とブナ・ギルワに次いでラエ・サラモア作戦、サラワケット転進、フィンシハーヘンの作戦、ガリ転進、ボガジン渓谷の戦闘、アイタペ作戦、邀撃作戦を展開した。全期

間を通じて殆ど食糧の補給なく人員・兵器・弾薬・通信機・薬剤等の一切の補給もない儘、長距離機動と戦闘を繰返し、特に 19 年初め以来は海空の支援皆無の孤立無援、最後は後方部隊迄その小銃を持って第一線で戦った。真に挙軍一体、最後の最後まで済々と全軍が戦い抜いたのである。

大東亜戦争では各部隊共国民の期待に応え、夫々勇戦敢闘し、特に太平洋に於いては次々に孤島防衛の各部隊が相継いで玉砕する等、広く国民に痛撃を与えたが、ここニューギニアについては特に「ジャワの極楽、ビルマの地獄、生きて帰れぬニューギニア」と言われ、戦後芥川賞作家の野呂氏に「帝国陸軍が嘗めた凡有る惨苦の集約しているのがニューギニアの戦闘である」と言わせているのである。

確かにわが東部ニューギニアの戦いは、全陸軍中他にその例を見ない、戦争の全期間に近い 3 年の長期を人間が堪えうる限度を遥かに超える苦難に耐え最後まで立派に戦い抜いた部隊は他にないのである。

更に、日本侵攻のマッカーサー軍との戦いも、その参戦から沖縄上陸迄 2 年半の内第 18 軍は 1 年半をその正面に拘束したのである。

そして、このような第 18 軍の奮闘に対し、陸軍の歴史で初めてという軍に対する感状を南方総軍は我が第 18 軍に授与したのである。

この第 18 軍の作戦の中心として活躍したのは 20・41・51 の 3 個師団であることは間違いないが、軍のれい下指揮下全部隊即ち高射部隊・野戦砲部隊・独立工兵隊・野戦道路隊・自動車大隊・航空地上各部隊・船舶各部隊・兵站部隊・兵站病院等々全国各地で編成した約 3 00 隊隊員の功績によるものである。

これ以外に陸軍飛行師団・海軍航空部隊及び陸戦隊等が共に戦いに共に同じ苦労を味わい、多くの戦死者を出したのであり、心から感謝申し上げたい。

戦後、ニューギニアに慰霊の為、お一人で、友人とあるいは遺族会の推薦で行かれた方も沢山おられると思うし、故人や部隊で出したニューギニアに関する書籍を読まれた方も多いであろうし、戦後既に 70 年以上が経ち肉親への思いも自然に薄らいでいる方もいるであろう。

私は今年の 6 月には 107 歳となるが、敢えてこの本を書いたのは、実は私の心からの戦没者への思いからである。

この戦争に参加した 15 万名の内 13 万名が戦死し、戦後帰国した 1 万名も 5 年以内に半数となり、現在生きているのは私の他に 1～2 名に過ぎない。

そこでご遺族の皆様特に若い人々に、「自分のおじいさん、大伯父さん達は日本人として最も名誉ある戦死を遂げられた。自分はその誇り高い親族の一人である」という事を、しっかり心にとめて頂きたいのである。私の体験からも、いよいよ死が迫った時まず頭に浮かぶのは、肉親のことであり、戦死された後もその思いは頭の中から離れることなくはっきりと残されているのである。

そしてもう 1 つは本文にある様に、戦後紆余曲折を経て戦友が主体で遺骨収集を行い、戦友たちが現地に行けなくなった後 20 年間は、森本・平山・横山・武藤戦友遺族会所属の遺児 4 名が遺族会推薦の遺児たちと共に、残された遺骨収集に加え毎年 4 月 5 日の戦死者慰霊の神楽舞奉納時の総会その他の業務一切を引き受け、今日に至っている。しかし 4 人は既に 80 代となって、ニューギニアの現地に行くことが難し

くなってきたのに、ご遺骨の約 7 万名は今なお草蒸す屍、水漬く屍の儘、一日千秋の思いで帰国の日を待ち焦がれておられ､又ホルランジャとアイタペの兵站関係部隊約 1 万名は昭和 19 年 4 月米軍の上陸により西ニューギニアに向かったが、長年に亘りインドネシアに現地調査を願っているが､残念ながらいまだ実現にさえ至っていないのである。

現地の状況をつぶさに体験している私としては、何としてでも死ぬまでには現在の 4 人を引き継いで、既にお願いし 2 年間同行して頂いて来た隊友会の有志の皆さんと収骨活動に従事し又神楽舞奉納・総会の事務等も現在の 4 人を助けて、長く実施できることを、是非共是非共お願いしたいのである。

先にホームページを開設し､東部ニューギニアについて広くご理解そしてご協力をお願いしているが、本書はその裏付けともと考え作成したものである。

重ねてご熟読頂き、そしてご協力を心からお願いし、大変長くなったが序文とさせて頂いた。

尚、出来れば本書を、出来るだけ多くの国民の皆様にもお読み頂き、これからの収骨作業や慰霊の為にお力を頂くことが出来れば 13 万英霊もどんなにかお喜びかと、ご協力を心から願う次第である。

第一章　物凄いニューギニアでの第 18 軍の作戦

Ⅰ. 何故ニューギニアで陸上作戦が行われるようになったのか

大東亜戦争開戦時の陸海協定により昭和 17 年 11 月に陸海軍部隊が連合艦隊の基地トラックの右翼の要衛ラバウルを占領したその夜から､連日連夜の航空爆撃を受け、海軍にとって大きな課題を抱えることになった。

その後 3 月に陸海軍は米国の反撃開始は 18 年夏頃と判断し、連合艦隊の熱望するミッドウェー攻撃後米本国と反撃の拠点となる豪州とを遮断する為、フィジー・サモアを陸海が協力して奪取すると共に、ガダルカナル・ポートモレスビー・ラエサラモアを占領し､豪州の北西部を制圧することを決めた。そのミッドウェー海戦に先立ち、まず 3 月に南海支隊の 1 カ大隊・海軍陸戦隊を以て無事サラモア・ラエを占領したが 3 月 10 日大空襲を受け、開戦後初めての沈没 4 隻の被害を受けた。更に 5 月には別の機動艦隊に南海支隊を乗せ、海上からポートモレスビー攻略を試みたが珊瑚海で米機動艦隊と遭遇し､互いに空母を失いラバウルに帰港した。その 1 か月後 6 月連合艦隊はミッドウェー攻撃を敢行したが、主力空母 4 隻を失う敗戦となり、フィジー・サモア奪取はやめることとなった。

その様な中 7 月初め海軍は、独力で飛行場建設の目的をもってガダルカナルを占領し、陸軍は本島北岸に上陸し 3 千ｍのオーエンスタンレー山脈を越えポートモレスビーを攻撃することになったのである｡オーエンスタンレー越えの道の在否も分からず、事前に地形偵察を行うことなくである。

これに対し 2 月米英の合議により、太平洋は米国の担当と決し、その最高司令官

はニミッツ海軍大将とし西太平洋地区はマッカーサー大将の担当とし、7 月には両者の間で 8 月から反撃計画を決定していたのである。

そして早くも 8 月には米海兵師団が強力な海空戦力の支援の下にガダルカナル島に上陸し、一方ニューギニア本島では特にマッカーサーはポートモレスビーの強化に努力し、6 月迄に 1 か旅団、8 月には両国の航空その他 2 万 8 千名を擁するようにしていた他、土民軍の編成にも取組んだのである。

問題の第一は、その一部は早くから当地域に出現し本格的行動をしているのに何故反撃の開始が 1 年半も先と断じたのか。

しかも海軍はガダルカナル島確保を強く主張し次々と地上部隊の投入となり、3 次に亘るソロモン海戦となり、陸海軍とくに海軍は大きな痛手を負うことになったのである。

一方ニューギニア本土方面も豪州は次々とポートモレスビーに兵力を送り、南海支隊の進撃の前に立ちはだかり、その上ガダルカナル島固守の方針により全隊上陸地への後退確保を命じられたのである。

後退した部隊は追撃の豪軍により悪戦苦闘し頑張っていたが、11 月末にはマッカーサー軍も戦闘に加入してきたのである。

南海支隊の上陸地における戦闘は真に壮絶を極めたものであった。各部隊は指揮官以下の多くを失い、戦力低下の上に、殆ど食べるものもなく、海軍の支援の全くない中、敵は更に猛烈な空爆や砲撃に加え戦車を伴った執拗極まる攻撃である。

ミッドウェーとソロモン海で多くの艦を失った海軍は、5 千ｋｍに及ぶ国内からの

補給についてどのように考えていたのか。国力の限界を超えて兵を遠く派遣した場合、末端の戦闘の結果が全体の勝敗を決するという戦略の原則を、特にマッカーサー軍が当正面に展開した今日、大本営はどの様に考え、今後の作戦に処することにしたのか。

終戦まで続いた第 18 軍の苦難の歴史の第一歩である。

Ⅱ． 3年間も他にない苦労を味わった、その苦労とは

大東亜戦争も第 2 段階に入り、太平洋が主戦場になると、やがて次々と孤島の玉砕が報じられ、国民の心を痛め続けた。

この間昭和 17 年 11 月に編成した東部ニューギニアの第 18 軍は、南海支隊のポートモレスビーの攻撃以来終戦迄約 3 年間を、人間の堪えうる限度を遥かに超える環境の中を、大敵に些かも屈することなく全軍真に一体となり、立派に戦い抜いたのである。

そして、マッカーサーの参戦から沖縄上陸迄の 2 年 4 カ月のうち、約 1 年半を我が第 18 軍の戦域内に拘束したのである。

以下、まずその特性について述べる。

1. 制海制空権の喪失による補給の困難（皆無）

ミッドウェーと 3 次に亘るソロモン海戦の後、米海軍の潜水艦の活動は逐次中部太平洋より西方に迄その範囲を広め、5 千ｋｍ南方ニューギニアに対する輸送船は、特にパラオからの海上で撃沈される数を増やし、敵の強力な制空権の関係からウエワクに入港せざるを得なかった船もマッカーサーの航空部隊の攻撃により少量しか揚陸できず、更に揚陸した補給品もその集積地を爆撃されたのである。

しかもこれら補給品の第一線部隊への供給は敵の制空（昼間）魚雷艇（夜間）の下、大発小発と徴発された漁船軍や海上トラックによる幾日もかけての輸送であった。

そして最後は第一線への一人一人による担送で補給品の第一線に届くことは殆どなくなったのである。

（参考）ラバウル←→ラエ・サラモア間　＝　東京　←→仙台

ウエワク←→フィンシハーフェン＝　名古屋←→広島

ウエワク←→マダン　　＝　名古屋←→東京

ウエワクに対する輸送船の入港は 19 年 3 月以降終戦迄全くなかったのである

尚、補給品は人員・食糧・兵器・弾薬。通信機・薬剤等の全てであり、これにより部隊は戦う度、機動の度、更に時間の経過と共に、本来の力と機動力をどんどん低下したのである。

2. 圧倒的な戦力の違いがある連合軍との戦い

(1) 両軍の基幹戦力

① 我が軍

（陸）17.2～18.2　南海支隊のみ

（陸）18.1～　　3 ヵ師団基幹飛行 1 ヵ師団

18.3～12　　〃　　2 ヵ師団

18 夏～19.3　陸軍の僅かな航空機支援

（海）18.3 迄　　駆逐艦・航空機による部隊輸送支援

（海）19.3 迄　　極く一部で潜水艦による補給

② 連合軍

（豪）17.7～18.1　陸軍　1 ヵ師団強

（米）　17.11～　　陸　　5 ヵ師団以上（各種重火器・戦車）

航空　常時千機稼働

海　　機動艦隊　1

我が軍はその戦力を低下するばかりであったが、連合軍は補給基地が 1 千ｋｍの豪州にあり、人員・兵器・弾薬等を常時充足した。

(2) 航空部隊はその最後まで開戦当初の儘で戦った

① 我が軍は南海支隊や 51 師団のワウ及びラエの輸送迄は海軍の航空隊が支援したが、１８年４月以降は満州から転進した飛行第６師団が第 18 軍の支援に当たった。18 年 3 月ラバウルからウエワク・ブーツの両飛行場に移動した師団の任務は敵の航空攻撃に対し両飛行場及び輸送船の入港・揚陸の掩護を主任務とし、併せて、敵飛行場の攻撃・地上戦闘の支援を行ったが、ただ敵飛行場は多く、かつ多数の迎撃機による損害が大きく､地上戦闘支援はその遠さから残念ながら戦機に投ぜられないことも多かったのである。

② これに対し連合軍は、戦場の移動と共にその後方に飛行場を建設し、戦場の制空を確保すると共に密接にその戦闘に協力し、成果を挙げたのである。

18 年 3 月大本営は東部ニューギニアの作戦重視を決定し、陸海それぞれニューギニアにおける戦力の強化を図ることになり､陸軍は地上師団の増加に代え多数の高射部隊と道路隊を増強すると共になけなしの飛行 7 師団を増加することにした。

同 7 師団は１８年 7 月末ブーツに到着して飛行 6 師団と共に合計 150 機を以て敵の飛行場攻撃を準備中、敵に機先を制され全機膨大な被害を受け、我が航空能

力は急激に沈下してしまったのである。航空各部隊は食糧補給も乏しく病に倒れるもの多き中を、全員協力して頑張ったが、北満での戦闘を想定して作った機は高温多湿のニューギニアでは故障も多くその上彼我性能の差もあり、しかも人員・器材の補給もなく、遂に 19 年 3 月以降は終戦迄の約 1 年半は、海軍及び航空部隊の支援の全くない孤立無援の戦場となったのである。

(3) 後方部隊の第一線投入

基幹戦力である師団は共に年月の経過と休むことのない戦闘及び機動により、まずその第一線の主戦力である歩兵連隊がその勢力を大きく減少し師団はまずその本来の機能を喪失した。まず師団の砲兵部隊等を以て、第一線歩兵人員減の補充したが、その後軍は逐次機能を失った高射関係部隊・迫撃砲隊・舟艇連隊・自動車大隊等の直轄各部隊、後方部隊更に残された航空基地の地上諸部隊等その自衛用の小銃を以て第一線に投入し、各師団長指揮下で、最後まで第一線歩兵の任に就いたのである。

(4) 海軍の協力が当初は少しあったが、18 年 9 月以降は殆どなく、柿内部隊のみの協力であった。

(5) 自然環境の厳しさ

① 我が戦場東部ニューギニアはその広さが日本と同じであるのに対し、人口は 60 万人である。

食料は、自作の芋と所によりサゴ椰子から採取する澱粉だけである。

食糧補給のない我々にとってこれらは命の綱であるが、我々の腹を充たすには

余りにも少ないのである。それでなくても大きく人員を欠いた部隊は戦闘に当たり何とか食べるものを求め、常に 3 分の 1 の人員を食糧探しに当てたのである。

② 風土病であるマラリアには全員が罹った。毎月 1 回 39 度から 40 度の高熱が 3, 4 日続き、これが全員の体力を益々低下させ、中には脳を冒され半狂いで死んでいく者も少なくなかった。

③ 交通障害による部隊移転に長時間を要し且つ体力低下

作戦地域ブナギルワとホルランジャ（青森と岡山の距離）を結び海岸道はあるが、殆ど全部が現地人の歩道で、途中大河（セビック・ラム・マーカム等）の他無数の中小河川があり、海岸に並行する 1 千ｍの山脈に雨が降る度に忽ち大河激流となる。又海岸近くまでジャングル繁茂、湿地帯多く、特にラムーセピック間 100ｋｍの大湿地帯は大きな障害であった。道路は砲類の曳行は不可能であり、敵の海上及び空輸に対し、機動に大なる時間を要し、戦機を逸することも多く、戦いを益々困難にした。

尚、全山のジャングルは部隊人員の投入を難しくすると共に、第一線陣地に対する補給を困難にした。

各師団はこの道を克服し、機動―戦闘―機動―戦闘と殆ど休む時も機動したのが、例えば 20 師団主力の行動距離は 2 千 5 百ｋｍに及んでいる。機動による体力の消耗、機に投じ得ず戦機を逸する事態も生じ、任務の達成を困難にすることが多かったことを考えると、この道路に即した軍の基幹師団数 3 ヵ師団は当初からも

っと多くすべきであったことが考えられる。

④ 赤道直下多雨、平地高湿、山地寒冷の気候

雨季になると連日の豪雨が続いたが、それ以外の時も毎日のように雨が降ることが多く、平地は高湿であるが、一度山地に入ると気温低下、現地人も 2 階で囲炉裏を囲んでの毎日であった。着ているもの一枚の我々にとっても、用心・用心であった。

3. 膨大な死亡者

(1) 投入全兵力

南海支隊	10 千名（17.7～18.2）
第 18 軍　3 ヵ師団	67 千名（18.1～終戦）
約 300 部隊	18 千名（18.1～終戦）
陸軍航空部隊	16 千名（18.3～18.12）
船舶関連	13 千名
海軍関連部隊	50 千名
合　　計	約　18 万名

(2) 第 18 軍の死亡総数　約 13 万名

戦闘による死者	35～40%
病気・飢餓による死者	60～65%
海水没による死者数	約 1 万名

(3) 重要部隊等の死亡者

師団長　3 名　20D2 名　41D　1 名

歩兵団長・旅団長 6 名（南海支隊 2 名、20D41D 各 1 名、51D2 名）

軍参謀　7 名（最初から終戦まで健在　2 名）

師団参謀（最初から終戦まで健在　20D41D 各 1 名）

連・大隊長（最初から終戦まで健在　殆どなし）

中隊長（特に歩兵連隊では死亡により何代も交代）

(4) 終戦時帰国者数　1 万 72 名

内、帰国後 5 年以内の死亡　約半数

Ⅲ. 最後の最後まで全軍済正と戦い抜いた実態は

1. 軍の行った主要な作戦とその概要

以上の様な筆舌に尽せない厳しい条件下､軍は 3 年間に亘り南海支隊の後を継ぎ、「作戦概要図」及び「作戦推移概要」に示す様に、北上するマッカーサー軍と次々と精魂を込めた激戦を展開したのである。

長きに亘って安達軍司令官の下､全隊員は如何なる状況下でもお互いを励まし助け合いながらその任務を全うして､肉親や故郷に思いを馳せながら､祖国のためにその尊い一命を捧げたのである。そして最後の最後まで規律厳正で 3 年の間一度の抗命事件も起きていない。斉正たる隊容を維持し､全軍力尽きて玉砕を決意しなお奮戦中であった第 18 軍に対し、真の皇軍ここにありと多くの国民から認められ、総軍司令官からは日本の歴史にかつて無い「軍に対する感状」を授与されたのである。

どうしてこのようなことを成し遂げることができたのであろうか。

2. 作戦推移

第 18 軍関係作戦推移概要（1/3）

年	月	日	作戦推移	項　　目
16	12	8	↑	大東亜戦争開戦
17	1	23	｜	ラバウル・カビエン攻略
	2	9	｜	スルミ占領
	3	7	｜	ラエ・サラモア占領
	4	8	｜	ロレンゴウ占領
	5	3	｜	ツラギ占領
		8	｜	珊瑚海海戦
	6	5	｜	ミッドウェー海戦
	7	2	｜	米　統合参謀本部　反撃方針決定
		5	｜	海軍　ガ島占領
		11	｜	F・S 作戦中止命令
		18	｜	ポートモレスビーへの陸路侵攻に踏切る（第 17 軍）
		21	｜	先遣隊　ゴナ・ギルワ上陸
		24	｜	第 17 軍司令部　ラバウルに上陸
	8	31	｜	ラバウルで陸海軍協定
		7	｜	米軍　ガダルカナル・ツラギ攻撃・占拠
		18	｜	南海支隊主力　バザブア上陸
		20	｜	一木支隊　ガ島攻撃失敗
		24	｜	南海支隊長　ココダ出発
	9	25	｜	海軍第 3 陸戦隊　ミルン湾に上陸
		16	｜	南海支隊　イオリバイワ占領
		22	｜	歩 41　ココダに着到
	10	23	｜	南海支隊のイオリバイワの撤収発令（第 17 軍）
		4	｜	歩 144　ココダに着到
		9	｜	第 17 軍司令部　ガ島に進出
	11	25	｜	第 2 師団　ガ島総攻撃失敗
		10	｜	南海支隊長　ブナ方面への撤退決心
		16	｜	第 8 方面軍及び第 18 軍　編成完結
		16	｜	連合軍　ブナ南方オロ湾に上陸
		19	↓	堀井南海支隊長　ギルワ沖合で海没、戦死
		26	↑	第 8 方面軍・第 18 軍　統帥発動（ラバウル）
		26	｜	独混 21 旅団　第 18 軍に隷入さる

第八方面軍・第十八軍統帥発動以前の全般状況

ポートモレスビー攻略作戦（第十七軍）

第 18 軍関係作戦推移概要（2/3）

年	月	日	作戦推移	項　　目
17	12	8	←ブナ作戦→	バザブア守備隊　玉砕（開戦 1 周年目）
		21		大本営第 8 方面軍　ブナ地域確保任務解除
		25		在ラバウルの第 51 師団　第 18 軍に隷入発令
18	1	2		ブナ地区部隊　玉砕
		4		大本営　ガ島撤退発令
		7	←ワウ作戦→	第 51 師団岡部支隊　ラエ上陸
		19		第 20 師団主力　ウエワク上陸
		20		ギルア部隊撤退　小田南海支隊長　自刃
	2	7		ガ島撤退　完了
		20		第 41 師団主力　ウエワク上陸
		24		岡部支隊　ワウ攻撃失敗、ムボに集結
	3	3	←サラモア・ラエ作戦→	第 51 師団　ダンビール海峡の悲劇(海没死約 3 千人)
	4	18		山本連合艦隊司令官　戦死
		19		第 18 軍司令部　マダンに転移
	5	初旬		敵　ムボ方面から攻撃開始
	6	30		敵　ナツソウ湾に上陸
	7			安達軍司令官　サラモア前線視察
	8	10		第 4 航空軍　統帥発動
		16		ウエワク・ブーツ地区　大空襲（第 4 航空軍壊滅的被害）
	9	4		敵　ポポイに上陸
		4		第 51 師団　サラモア撤退・ラエ撤退準備発令
		5		敵　ナザブに落下傘降下
		12	←サラワ転進→	ラエ地区先頭部隊　サラワケット越えの転進開始
		14		第 51 師団　ラエに撤収完了
		22	←フィンシハーフェン作戦→	敵　フィンシハーフェンに上陸
		23		サワワケット越えの先頭　キアリ着
	10	16		第 20 師団　フィンシハーフェン第 1 次攻撃開始
	11	22		〃　〃　第 2 次　〃
	12	15		敵　ニューブリテン・マーカス岬に上陸
		17		第 18 軍　ラコナーシ地区持久任務発令(第 8 方面軍)

第 18 軍関係作戦推移概要（3/3）

年	月	日	作戦推移	項　　目
18	12	19		第 20 師団　フィンシハーフェン付近より撤退開始
		26		敵　ニューブリテン・ツルブに上陸
19	1	2	←ガリ転進→	敵　サイドールに上陸
		2		第 18 軍　シオ地域持久任務解除（第 8 方面軍）
	2			ガリ転進開始
	3	14		大本営　第 18 軍・第 4 航空軍の第 2 方面軍への隷属
		16		発令
	4	21	↑	第 20 師団　ハンサに集結完了
		22	ラムセピック転進 ↓↑	敵　ホーランジャ大空襲
	5			敵　アイタペ・ホーランジャに上陸
	7	10	アイタペ作戦 ↓	
	8	4		第 18 軍　アイタペ総攻撃開始
	10		↑	〃　　〃　　終結
20	2		山北撤退作戦 ↓	
	4		↑	
	6	25		
	8	8		玉砕命令発令（9 月末日迄）
		15	↓	豪軍 1 カ大隊　ヤンゴールに侵入
	9	13	山南撤退作戦	終戦
				豪軍に正式降伏

3.東部ニューギニアでの主な作戦

(1) 南海支隊のポートモレスビー攻撃

(2) 南海支隊のブナギルア地区確保

(3) 51 師団のラエ・サラモアの作戦

①ワウ攻撃

②ダンピール作戦の悲劇

③サラモアの戦闘

④ラエの戦闘

⑤サラワケット越え

(4) この間の関係部隊の動き

(5) 20 師団のフィンシハーヘンの攻防

(6) ボガジン渓谷方面の中井支隊の戦い

(7) 20 師団 51 師団のガリ転進

(8) 第 2 方面軍の指揮下に入る

(9) アイタペ・ホルランジャ上陸

(10) 軍主力のアイタペ攻撃

(11) 軍のアイタペ攻撃決定までの経緯

(12) アイタペ攻撃

(13) 迎撃態勢への移行

(14) 邀撃作戦

(1) 南海支隊のポートモレスビー攻撃

① 参加部隊

我軍　　南海支隊（104 連隊 41 連隊独立 15 工兵連隊 47 高射砲大隊その他約 10000 名）

横須賀第 5 陸戦隊（ブナで飛行場確保）

連合軍　豪 21 旅団、空軍

② ポートモレスビー攻略

③ 作戦期間　17 年 7 月―10 月（3 ヶ月）

④ 戦闘概況

全く地形等の偵察もせずポートモレスビーへの道路の存在も不明の儘､海空掩護の下で部隊の先遣隊は 17 年 7 月、主力は 8 月北岸のバザブアに無血上陸し一路ポートモレスビーを目指した。

オーエンスタンレー山脈（3 千ｍ）の山麓ココダで初めて豪軍中隊を撃破し、引続き山脈の嶮路を逐次増加する敵を撃破し､9 月 18 日 10 ヵ大隊に迄増強した敵を両連隊協力して撃破しポートモレスビーの灯の見えるイオリバイパを占領したのである。

部隊は遠路かつ嶮路担送による補給の困難による食料不足と相次ぐ峻険な地形下の激戦による戦死傷者の増大とこれが後送の困難と部隊戦力の低下による今後の進撃の継続が極めて困難な状況に直面したのである。

又、この間海軍陸戦隊 3 隊が南海支隊に呼応し敵の飛行場奪取の為、ミルン湾に上陸をしたが、上陸地が遠く結局 2 週間余りの戦闘の後全部を撤収した。

一方南海支隊の上陸直前に海軍はガダルカナル島に飛行場建設の為に上陸したが、1か月後の8月米海兵師団上陸、陸海話合いの結果、ガダルカナル島に全力を注入することになり、南海支隊に対する海軍の支援は一切中止の為これを上陸地点に引き戻しガダルカナル島解決迄独力同地確保を決定、南海支隊は10月イオリバイパからの後退を始めたのである。

(2) 南海支隊のブナギルア地区確保

① 参加部隊

我軍　南海支隊、横須賀第5陸戦隊

第18軍司令部　独立21旅団

敵軍　豪　2ヵ師団12000名

米　1ヵ師団13600名（11月以降）

空海軍

② 任務

ガダルカナル島解決迄ブナギルワ地区確保

③ 作戦期間　17.10～18.1　3ヶ月

④ 作戦概況

後退はまず独立工兵15連隊が先行してギルア地区に陣地構築

後退する各部隊は追撃する豪軍といたるところで激戦、途中堀井支隊長戦死

10月末漸く所定の陣地に就く

現地は平地湿地多くジャングルに覆われている。10 月初めからの豪軍の攻撃、11 月中旬からは米軍も攻撃開始。

まず空爆によりジャングルを疎林化し続いて猛烈な砲撃､そして戦車を伴った部隊の火焔発射手榴弾等を以てする肉迫である。それに対する我軍は少数の機関銃と小銃のみである。食料の補給はなく辺りには利用すべき何もない。時に舟艇で補給される極少量の食糧だけである。

戦死者が次々に出る。折角作った壕の掩蓋が破壊されると戦死者をこれに代える。このような激戦の中、第 18 軍司令部が 11 月末ラバウルで統帥を発動しこの南海支隊を指揮することになったのである。

軍司令官はこの南海支隊の窮状に対し自分が現地に行くことを強く望まれたが、方面軍軍司令官の命により断念はしたが、第一線を思う心は厚く、まず情報作戦の両参謀を派遣すると共に指揮下の 21 混成旅団の工兵隊長（一般工兵）との話し合いで大小発舟艇の運航技術を習得し南海支隊に救援物資の供給と重傷者を搬送させたが、同隊は真に挙隊一体となり南海支隊の撤退直前現地到着、その任務を見事達成したのである。ガダルカナル島情勢逼迫続ける中 21 旅団支隊をして救援のためにその搬送を強く要請して駆逐艦 4 隻を 4 回に亘り派遣、うち 1 回だけが辛うじて 1 ヵ中隊を上陸増援させる等軍司令官は考えられる救援のための最大限の努力をされたのである。

この間 12 月 8 日にはバサブア 1 月 2 日にはブナが玉砕したのである。このような戦況下ガダルカナル島も最後の第 2 師団の攻撃も成功せず､1 月 4 日に撤

退を開始し 2 月 7 日に完了したが、ギルワ方面からの撤退命令は 1 月 3 日、軍の命令は 14 日であるが、実際ギルワ部隊の撤退は 1 月 20 日であった。撤退直前に着任した小田少将は重傷で、後送不能の将兵と共に自決された。最後のギルワ部隊 800 名の撤退に当たっては、歩けないが上体を動かせる兵達は「敵の追撃は我々が阻止する」と言ってその場に残り、部隊は 3 日間敵の追撃を受けずに済んだのである。

又、本作戦間ブナ飛行場掩護の任に当たった高射砲 47 大隊は最後の一発迄戦ったが、この間の敵機爆撃数は 47 機である。この戦闘には米国のアイケルバーガー将軍が参加されているが、その血みどろの戦記には世界一の強い軍隊をここに見たと書いているが、南海支隊の健闘は真に日本人の神髄を遺憾なく発揮した戦闘である。

⑤ 上記戦闘による彼我の損害

我　戦死　約　9 千名

豪　戦死　約　6 千名

米　戦死　約　3 千名　後送　約　8 千名

(3) 51 師団のラエ・サラモアの作戦

当時のマッカーサー軍の目標は、まずラバウルを占領し引続きニューギニア本島の北岸を西進しフィリピン奪取後日本本土を目指すものと考えられており、ニューギニア本島ではラエ・サラモアの防衛が考えられ、軍は当時主力がラバウルにいた 51 師団にその任を命じた。そしてラエ・サラモア防衛の為にはその前方の拠点ワ

ウを早急に占領することが決せられた。

① ワウ攻撃

（ア）参加部隊

我　歩兵 102 連隊主力（水戸)、野砲 17 大隊、工兵 1 ヵ中隊基幹

敵　豪州軍

（イ）指揮官　51 歩兵団長　岡部少将

（ウ）行動概要

18 年 1 月 7 日海軍の海空掩護の下ラエに上陸（途中輸送船 1 隻撃沈）したが、上陸直後大東亜戦争開始後初めての大爆撃により、揚陸品全滅、輸送船も海岸に擱座させられた。

支隊長はサラモアーワウ道を変更し全隊ジャングル経由ワウに向かうことにした。ところが途中難路が続き前進遅滞、食料欠乏、落伍者続出で 1 月 27 日漸くワウ地区に到着した。この間豪軍は空中輸送により兵力を 4 ヵ大隊迄増強し、飛行場を中心に強固な防衛体制を整えていた。

支隊長は早期攻撃を期し、29 日兵力を減少し、疲労困憊の部隊 2 ヵ大隊を並列しこの敵を攻撃したが、地形上その攻撃はマチマチとなり失敗。その後も粘り強く攻撃したがいずれも成功せず 2 月 4 日に右翼を包囲されるに至りやむなく攻撃を中止し師団命令により 2 月 24 日サラモアのムボに後退したのである。

（エ）損耗　102 連隊の戦力 2/3 に低下

② ダンピール海峡の悲劇（81 号作戦）

（ア）参加部隊

51 師団司令部、歩兵 115 連隊（高崎）その他師団各部隊基幹、その他後方部隊 7300 名、弾薬食料等 2 千トン

歩兵 66 連隊（宇都宮）は逐次パラオからラバウルに輸送中で参加せず

軍司令部同行

（イ）行動概要

2 月 28 日夜　輸送船 8 隻、駆逐艦 6 隻、上空掩護海陸分担

3 月　2 日　　輸送船 1 隻、敵の空撃により沈没

救助した兵を師団長乗船の駆逐艦に乗せ主力船団と別行動でラエに先行

3 月　3 日　　敵航空機当初一部高空から、続いて主力低空から船団攻撃。我が海軍航空部隊は高空から掩護中

敵の低空攻撃 20 分で輸送船全部､駆逐艦 3 隻撃沈溺死者 3700 名、弾薬食料 2 千トン海没。残った駆逐艦等で漂流者救出者を含め 2700 名ラバウルに引き返す。ラエ上陸師団長以下 800 名

③ 第 51 師団のサラモアの戦闘

サラモアの戦闘は兵力の損耗激しい劣弱な兵力を以て､極めて強烈な連合軍に対する 4 カ月に亘る真に死闘を繰返したサラモア確保の戦闘である。

（ア）参加部隊

我　　51 師団司令部　102 連隊（戦力 1/3 減）

115 連隊（漂流者を加え 2/3 減）

66 連隊（3 月末から海峡を舟艇で渡り逐次戦線加入）

野砲 26 連隊の一部

20 師団の 1 ヵ大隊（7 月から）

飛行 6 師団（基地ウエワク）

その他ラエに海軍基地隊 2500 名

41 師団庄下支隊長の 238 連隊（7 月から）

連合軍　豪　第 3 師団

米　第 4 師団の連隊

砲兵部隊、航空部隊

（イ）戦闘状況

3 月末までに師団長はワウから後退してきた 102 連隊の主力をムボ地区に一部をナツソウ湾正面に配置すると共に地形偵察の為自ら現地を廻り 4 月末にはボイミの右翼ナツソウ湾正面を 66 連隊、中央ムボ・カミアタム地区を 102 連隊、ワウーサラモア道に近い右翼を 115 連隊とすることにして、それぞれ防御態勢を固めた。又海軍はサラモア半島に高射砲部隊を配置。

敵の攻撃はまず豪軍によるムボ･カミアタム方面から 4 月末開始し 6 月末にはナツソウ湾に米軍も上陸してきた。

それぞれジャングルに覆われた険峻な地形である。 彼らはまず戦場後方に建設した飛行場を利用し台上のジャングルを爆撃し陣地を丸裸にした上で猛烈な砲

撃を加える。我軍は劣弱な戦闘力を以てする防御である。決して敵のこの攻撃に対し簡易に万歳突撃することなく我慢に我慢を重ねて、奪われれば奪い返すことを全線で行い、粘り強い防御戦を展開したのである。そしてこの間艇進隊を以て敵の司令部砲兵陣地等の攻撃を行う等真に一歩も引かずに戦い続けたのである。

我飛行 6 師団も 4 月にはラバウルからウエワク・ブーツに移転、両飛行場を基地としマダンを中間、ラエを前線飛行場とし白金少将自らラエの飛行場に滞在する等第一線の戦闘に積極的に協力したが、基地の遠さと天候気象の変化等により必ずしも第一線の戦闘に協力出来ずその出撃回数も機数も連合軍と比較して少なかったがこの第一線飛来は部隊の士気を大いに高めてくれたのである。

軍司令官も毎月のようにマダンから敵の制空権下をラエ迄飛び舟艇と徒歩による師団司令部行きを繰返し師団に対する 20 師団から出る歩兵 1 大隊の救援ラエ強化の為に 41 師団から歩兵団長の指揮する歩兵 1 ヵ連隊の急派を命じこれらの輸送のために舟艇部隊等の全力を投入されたのである。

ちなみに、派遣された 80 連隊の神野大隊は最後まで真に目を見張るように攻防の先頭に立ち見事な活躍をされたのである。

8 月初めの軍司令官の訪問の際、敵機に捕捉されパイロットの操縦よろしきを得て辛うじてツルブに逃れられた事があるが軍司令官は翌日はラエに引続き 5 日間師団長の下に居られたのである。

部隊は軍司令官の毎月の第一線訪問を初めとする手厚い支援を受け奮闘を続けていたが、敵が空輸により食糧その他全ての補給を行っていたのに対し我軍は

大変な難路を克服しての担送による補給であり連日満足な食事もなく脱落者いよいよ増加し、戦闘３ヶ月を過ぎ現体勢の維持はますます難しくなり師団長は８月中旬最後に玉砕を決意し戦線を収縮し更に戦闘を続けたのである。

軍は方面軍と話合い９月５日撤退を命じたのである。ところが９月３日夜ラエ東方ブソ川河口に豪１ヵ師団９月５日ナザブ平原に米豪連合の１ヵ師団が空挺降下したのである。

④ ラエの戦闘

（ア）目的

敵のラエ追撃阻止とサラワケット転進阻害阻止

（イ）対応した部隊

①東方　駐在していた陸軍各部隊 1200 名　実働　約 200 名

海軍基地隊 2500 名　実働　約 100 名

歩兵 238 連隊主力の２ヵ大隊

②西方　51 師団歩兵団司令部

14 砲兵連隊

師団主力から派遣した一部の部隊

野戦病院入院中の患者（銃を持って奮戦）

20 師団のボヘミヤ渓谷道路建設部隊の一部カイアピット

(ウ)特に東方に上陸した部隊はラエ攻撃を目指して活発に行動したが庄下支隊長の沈着適切な指揮と現地派遣の向井参謀の活躍は目覚ましく師団の整然たるサ

ラワケット出発を可能にしたのである。

⑤サラワケット越え

折柄北本工作隊サラワケットを越えラム到着

9 月 7 日 51 師団の退路はサラワケットと決定

（ア）経路は略図の通り

（イ）撤退開始 9 月 2 日

（ウ）人員　陸軍約 6000 名、海軍約 2500 名、合計 8500 名

（エ）先頭海軍部隊キアリ到着の 9 月 20 日、最終部隊 10 月末

（オ）食糧携行 10 日分

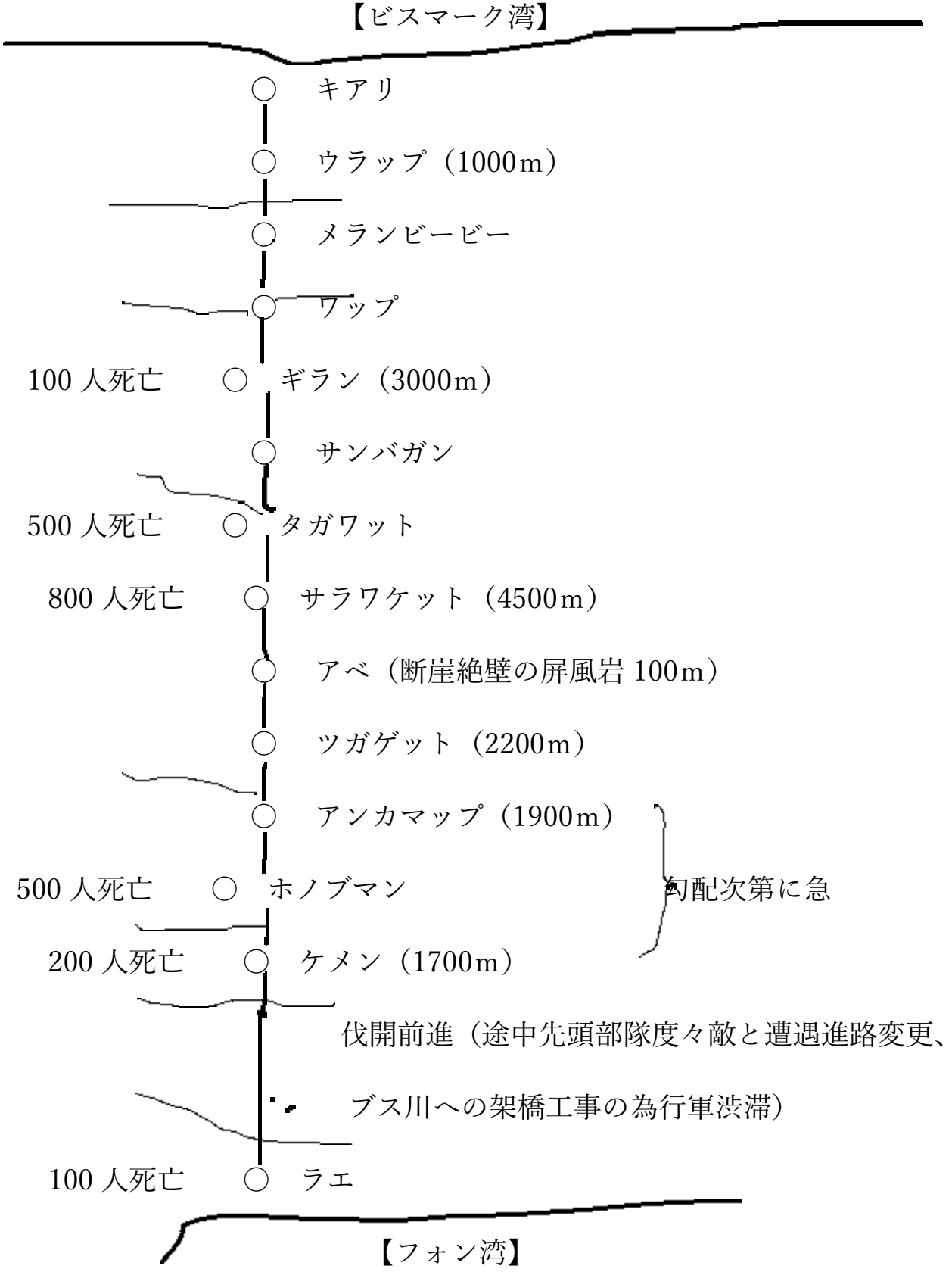
（カ）損耗　2200 名

（キ）途中の状況

ブソ河渡河の後 2 千 m3 千 m の山を越え特にサラワケット（4 千m）の手前の 100m を越す岸壁登攀は困難であったが台上は草原で夜間は寒さに震えた。

途中お互いに励ましあい助けたり助けられたりの行軍であった。

サラワケット転進図



【サラワケット越えの歌】

㋐　底なき谷を這い上り　道なき道をよじ登り

今日も続くぞ明日もまた　峰の頂きほど遠し

㋑　傷める友の手を取りて　頼む命のつた葛

しばしたじろぐ岩角に　名もなき花の乱れ咲く

㋒　既に乏しき我が糧に　木の葉草の根補いつ

友にすすめる一夜は　サラワケットの月寒し

㋓　遥けき御空宮城を　伏し拝みつつ勇士らが

讃えることの真心に　応うるがごとく山崩る

特に4カ月間乏しい食糧に堪え激戦を戦い抜き体力特に衰えていた51師団の将兵にとりこのサラワケットが如何に厳しい転進であったか思うだに心が震えるのである。

（ク）舟艇による患者の後送

転進に当たり野戦病院の重病者を如何に措置するかの悩みはブナギルワの時と同じである。

幸いに折柄入港した潜水艦1隻により80名を9月12日夜フィンシハーヘンに後送することが出来たが残りの100名の措置である。

幸いにも船舶工兵連隊の寺村中尉が引受け、船工5から大発3小発1船工8から大発2装甲艦1の7隻に100名を乗せ9月14日夜2時ラエ出発4時荷揚げ中の敵中を魚雷艇2隻の攻撃を受けながら突破し、途中昼間は秘匿地で退避し16日無事フィンシハーヘンに到着したのである。

(4) この間の関係部隊等の動き

① 第 20，第 41 師団について

両師団は 18 年 1 月と 2 月にウエワクに上陸し、爾後 20 師団はウエワク、41 師団はブーツの飛行場の建設に協力した。

両飛行場は共にジャングルを抜開しその根を全て堀上げ、後を手ならしして飛行場にするが、全部手作業の為完全な飛行場にする為には大変な労力と時間がかかるのであり東部ニューギニアの第 18 軍に協力する飛行 6 師団がその基地をラバウルからこのウエワクとブーツに移しニューギニアに展開したのは 18 年 4 月に入ってからである。

2 ヵ師団は 3 月まず一部を次いで主力もマダン地区に推進し同地区飛行場の建設や道路整備に当たり 5 月からは師団全力を以てラム河上流に通じるボヘミヤ渓谷の自動車道の建設に当たっていたのである。目的は敵に先立ちベナベナハーゲンを占領し敵の飛行場建設を防止するためである。

41 師団はその後主力を以てハンサ―マダン地区に移動し該地区の自動車道の整備と防衛に当たった。

② 軍司令部は 4 月中旬ラバウルからマダンの北猛頭山に移動、翌 19 年 2 月迄ここを拠点として指揮したのである。

③ この間兵站各部隊も輸送船入港のウエワクを拠点としハンサとマダンにも必要な部隊等を配置し緊密に作戦を支援できるよう態勢を整備したのである。

(5) 20 師団のフィンシハーヘンの攻防戦

フィンシハーヘンはニューブリテン島のツルブと共にビスマーク海への関門の要衛であり、マッカーサーがラバウルを攻略するにも比島方面に侵攻するにも必ず攻略しなければならない重要な地域である。

しかしこれを阻止するには、ラエ・サラモアの確保が必要であり、又ベナベナハーゲン高地を先取することにより敵の飛行場群の建設を阻止できるとの中央の判断指示により、軍は 5 月以来第 20 師団をボガジン渓谷に投入し、マーカム川上流までの道路建設に当たらせ、41 師団は 20 師団に代わりハンサ・マダン地区の防衛に当たらせていたのである。

そして 8 月末フィンシハーヘンに所在していたのは、船舶司令部と少数の陸海軍部隊だけである。

① 80 連隊の戦闘

サラモアの戦況は 7 月に入りいよいよ急迫の度を加えつつあるにもかかわらず、フィンシハーヘンの情況が無防備に近いことを憂慮した軍司令官は、7 月 26 日独断で道路工事中の 20 師団に 80 連隊のフィンシハーヘンに急行し同地区確保することを命じたのである。

部隊は大小発と漁船軍等の支援を受けながら 300ｋｍの悪路を飢えに苦しみながら急進、9 月 10 日アント岬付近に到着山田船舶司令官の命令により一部をアント岬の警備に配置し、主力は 9 月 4 日ラエ東方に上陸した豪第 7 師団の陸路侵攻に備えフィンシハーヘンの南の要域に配置したのである。

ところが 9 月 22 日夜豪 20 師団が猛烈な砲撃と共にアント岬に上陸したのである。同地配置の中隊は 23 日航空の支援を得て攻撃を行う計画であったが、天候不良で飛来できず近くの飛行場を占領した敵はこれの拡張に努め早々に使用を開始した。

山田少将はこの敵に対し 80 連隊に攻撃を命じたが 2 日行程と離れており連隊はまず西南方サテルベルグに集結し、27 日攻撃を行ったが成功せず、爾後 2 週間に亘り食糧なき中、小部隊を以て激しく攻撃を繰り返したが、この間敵は兵力を増強し、飛行場も整備 300 機を以て戦場を支配するに至ったのである。

② 師団主力の戦闘

（ア）第 1 次攻撃

師団は命により歩兵 7 連隊を基幹とする中井支隊（歩兵団長中井少将）をボガジン渓谷の防衛の為現地に残し師団長以下歩兵 78 連隊を基幹とする師団を以て 9 月 10 日ボヘミアを出発し、2 ヵ船舶連隊漁船軍等の大部を挙げてハンサよりの食糧弾薬と共に主力の急行に協力し敵上陸の 9 月 22 日にはシオに達していたのである。

軍司令官は続いてフィンシハーヘン奪回を下命、主力は 10 月 11 日フィンシハーヘンに到着したのである。

79 連隊はタロ芋 1 個の食糧で耐えながら 16 日攻撃を開始、アント岬以北の敵の退路を遮断したが敵は 20 日反撃、紛戦となった。この攻撃に当たりこれに呼応し杉野中隊がアント岬の敵陣地に逆上陸し第 4 航空軍の 40 機の攻撃の支援を得

て多大の成果を挙げたが、隊員 190 名中 120 名の戦死者を出した。

この間敵は当初の第 20 旅団に 3 個旅団を加える強力なものとなっていた。

この間軍司令官は 10 月 19 日キアリに到着し集結中の５１師団を視察、その痩衰えた服はほころび靴は破れた将兵の姿に目を潤ませサラモア以来の労苦をねぎらい、31 日午後サッテルベルグに着いた。

（イ）師団の第 2 次戦闘

師団長は痩せ衰えた将兵を前に食糧弾丸も殆どない将兵にこれ以上の攻撃を命じることは出来かねると素直に申し出た。軍司令官は目頭を熱くしながら毅然として攻撃続行を命ずるよう指導を行った。示された攻撃方法は広正面の弱点をついて局部的に戦力を集中し逐次敵陣地を分割し奪取する各個撃破である。

軍司令官は師団長の思いは勿論十分分かるが、思いは唯一つ任務達成の為には最後の最後まで全力を尽くし切るという一貫した精神なのである。

軍司令官は、普段から部下に対する不信感を口にするとか、態度に表す様な事は絶対になく、この際も親補職である師団長に対する態度は丁重であり信頼関係に堅く結ばれた 2 人は最後まで静かに話し合われたのである。

師団長は 11 月 3 日 80 連隊にサッテルベルグ確保 79 連隊に敵の右翼攻撃そしてその他の部隊にも夫々攻撃の準備を命じた。

一方豪軍は更に 2 ヵ旅団を増強し 17 日戦車を先頭に攻撃開始したが激闘 3 日、師団はこれに堪え 22 日早朝より攻撃開始、サッテルベルグ周辺からアント岬北方の間で両者入り乱れての混戦である。

われは 18 年 1 月ウエワク上陸以来飛行場の建設、マダンへの機動 350ｋｍにボガジン渓谷道路工事、フィンシハーヘンへの機動 300ｋｍ、次いでフィンシハーヘンの戦闘と少量の食糧の下炎天下の行動で疲労困憊、実質 1 つの連隊にも満たない兵力に対し、豪軍は完全装備圧倒的な海空支援である。流石に 20 師団、よくぞ頑張ったものと頭を下げざるを得ない。この状況下師団長は両連隊に 11 月末更に攻撃を命じたが、12 月 4 日後退の伺いを行ったものの軍司令官は更なる奮闘をすべく激励したのである。方面軍はこの状況を見て 12 月 17 日フィンシハーヘン奪回の任務を解除しシオ地区の防衛を命じたのである。

(6) ボガジン渓谷方面の中井部隊の戦い

師団主力のフィンシハーヘン急行に基づきボガジン渓谷の防衛は
20 師団歩兵団長中井少将の下 78 連隊と野砲 26 連隊の第 1 大隊が当たることとなった。

当時マーカム河上流までの道路建設は全長 300ｋｍの内約 200ｋｍを建設したところである。

支隊長は早速 51 師団の転進を掩護する為、歩兵 1 ヵ大隊をカイアピットに派遣し出撃していた。豪軍を後退させ爾後は主力を以て歓喜嶺付近に迎撃の陣地を構築、その後砲 30 門以上を有する有力な敵が進出、10 月中旬ケセアに迄前進し又近くの飛行場から我を爆撃するに至ったので、支隊長はこれを攻撃撃退させたが、その後新たに飛行場を建設、道路沿いに逐次進撃してきた。

1月2日米のサイドル上陸と共に中井支隊長以下主力のサイドル方面転用に伴い後は松木支隊長が当方面の防衛を担当することになった。

敵の主攻撃目標の歓喜嶺担当の矢野大隊長はその左右の不抜山と屏風山を拠点とし本部確保策をとった。

敵は1月上旬猛攻を開始したが大隊は一歩も退かずその攻撃を全て挫折させた。殊に屏風山の防衛は壮烈であった。

両面が黒板の様な断崖で殆ど登攀できず、配兵も十数名に過ぎなかった。守備隊長片山中尉は稜線上に 3 段の陣地を構築し飛弾する砲弾にもひるまず敵は遂に爆弾の雨を降らすことを考え、最初に 15 機次に 25 機を以てしたが通ぜず、遂に 100 機を以て猛火を加えた。

文字通り山形あらたまったが、中隊長は阿修羅のごとく奮闘、最後の猛爆で第3陣地の守兵全員死滅、陣地の一部を占領、中隊長も銃を執って激戦中頭部をやられ惜しくも戦死し中隊全員も中隊長の遺志を奉じて奮戦し遂に屏風山上で玉砕したのである。

松本支隊は 19 年 2 月末第 20 第 50 師団のガリ転進の最後まで引続き奮闘、敵の進撃を阻止したのである。

(7) 第 50 第 20 両師団のガリ転進

① 米軍のサイドル上陸とその前後の状況

シオ地区の防衛を命ぜられた第 20 師団はその将兵の多くを失い疲れ切った身を一握りの食で耐えながら 12 月までに逐次後退、軍司令官はマダンから大発でシオに到着しこれを迎え心からの慰労を述べ激励をされた後、キアリの第 50 師団司令部に寄り、師団長と共に 19 年の元旦を迎えられた。当時 50 師団は 10 月末までフオン半島北海岸地区に到着、分散配置し第 20 師団後方地区の防護および部隊の再建をしていたのである。

この様な状況の中、1 月 2 日正午前米軍 1 ヵ戦闘団が猛烈な艦砲射撃の下マダン東方のサイドル（グンビ岬）に上陸した。

軍には20､50 両師団にもマダン方面にもこの敵を撃破する力はないと判断し、丁度斉藤成合大尉等が偵察していたガリからフィンステル山脈を経てサイドルの西に出る道を利用しマダンに出ることに決し、全般の指揮を 51 師団長がとり中野集団とした。

本計画決定と同時にボガジン渓谷の中野支隊は一部（1 大隊軍）を歓喜嶺地区の防衛に残し主力は中野集団の収容掩護に当たらせた。

20 師団にはシオ地区から、出発前潜水艦により食料補給の予定であったが、敵の妨害で支給できず、引続き疲れ切った身を相励まし相助けてガリに前進、50 師団も 11 日キアリを出発した。

折柄の連日の豪雨により益々悪くなった道を先行した 20 師団の将兵が､折り重なるように死んでいる者、池畔で水を飲まんとして頭を水につけた儘死んでいる者、小さな小屋に死体に並んで息絶えようとしている者、まさに死の街道で

ある。12 月末陸大を卒業して 51 師団参謀として赴任したばかりの私が見る初めての光景に為すべくもなく、胸つまり、一人一人深く頭を下げながらの毎日であった。

② 転進行

転進は比較的海岸に近く千m以上の山のない路を甲路とし、20 師団等の転進路とし、3 千mの山頂経由の路を乙路とし、51 師団等の転進路と決定、出発直前の 22 日待望の潜水艦 1 隻が入港、食料の補給を得て、これを 1 人当たり 20 師団等 1.8 升、海軍 1.5～2 升、50 師団 6 合とし配分したが、５0 師団の先発部隊と最後尾部隊には配布出来なかった。かくしてまず 50 師団の先発部隊が 1 月 23 日ガリを出発し爾後次々と各部隊が出発した。

出発後 2 日間は概ねなだらかな上り坂で沿道畑もあったが、毎日午後になると豪雨である。しかも爾後は山頂の部落から次の山頂の部落迄一山一山朝出発、蔦を頼りに一歩一歩下り多くの者が流された急流を渡り。今度は又蔦を頼りに上り、夕刻漸く山頂の小さな部落に到着するという毎日である。勿論辺りには畑らしい畑はない。

50 師団が体験したサラワケットより遥かに厳しい路であり、至る所先行者のれな姿を伏し拝みつつの毎日である。

漸くヨコパ山頂に近いノコボに到着し一息ついたが、朝には辺り一面に霜が降りるという寒さであり辺りのジャングル内の道に次々と倒れた大木が道を塞ぎ疲れ切った皆の脚を止めたのである。

下りの最初は続く千mの崖を横這いしながらの道である。しかしこの難所を越えた後は概ねまずまずの道となり、下りに従って部落も畑も多くなった。

甲路に向かった２０師団は途中絶壁に遭遇し乙路を前進した。

全部隊が中井支隊の下に到着したのは 2 月末であるが、シオ、キアリ出発時合計 15 千名であった中野集団の到着人員は 9300 名で､途中 4700 名が損耗した。

尚、沿道各部落から荷物運びの支援を受け又転進間米軍が転進妨害等の軍事行動を一切しなかった事は大変ありがたい事であった。

又、軍は途中病や疲労の為数多くの遅滞者がいることを予想し特別班により 1 カ月に亘り全経路を調査し 450 名を救出したが終戦後昭和 46 年に未帰還者 7 名がこの間病死した戦友 7 名の遺骨を奉持して帰還したのである。

(8) 第 2 方面軍へ所属変更

18 年 12 月フィンシハーヘンとニューブリテン島西部のツルブを占領した連合軍は 2 月中旬トラックの連合艦隊の基地を大空襲し、ラバウルの海軍航空全部隊が大挙トラックに移動した間隙を突きニューアドウルティを急襲し同地防衛の諸部隊を玉砕させ占領した。

これによりラバウルは完全に孤立することになり連合軍のフィリピン攻撃の路が開けたのである。

このような状況下、大本営は我が第 18 軍を第 8 方面から抜き、第 2 方面の隷下に所属を変更した。

第 2 方面司令官は連合軍の行動を勘案し、軍に対し主力を以て速やかにウエワ

ク以西に転進することとホルランジャ・アイタペ・ウエワクの航空基地強化を命じたのである。

当時軍の主力はハンサ以東にあり軍は 51 師団に対し速やかにウエワク地区の防衛当たること、第 20 師団にはアイタペ、第 41 師団にはウエアクに急進することを命じたのである。

これによる 4 月中旬の軍の体制は次の通りである。

司令部　51 師団　ウエワク

20 師団　先頭はウエワク、主力はラム・セピック通過中

41 師団　ハンサ・マダン間　　ハンサ以東 3 万名

第 6 飛行師団　　ホルランジャ（航空機極少数）

連合軍の絶対制空権はいよいよウエワク西部まで拡大し制海権も西大西洋に拡大し、輸送船のウエワク利用は不時に又ニューギニアに対する本土からの輸送は殆ど不可能になったのである。

軍は補給基地をホルランジャとする為 10 月以降兵站各部隊を以てその準備を進めていたのである。

(9) 米軍のホルランジャとアイタペ上陸

連合軍は 3 月末以来ホルランジャの我が航空基地に対し連日猛爆撃を行い、第 6 飛行師団を中心に一時 200 機まで増加していた我軍を攻撃し完膚なきまでに粉砕させられたのである。

かくして 4 月 22 日大空爆大艦砲射撃に次いで米の大群が上陸したのである。

アイタペも同じシステムでの上陸である。

① 彼我の兵力

（ア）ホルランジャ

米　陸軍第 2 師団

我　兵站各部隊　　6600 名

第 6 飛行師団　　7000 名　合計 14000 名　戦闘能力殆どなし

第 9 艦隊司令部　1000 名

（イ）アイタペ

米　陸軍 2 ヵ戦闘団

我　兵站部隊、海軍の一部、20 師団補充員　　合計 2000 名

（ウ）アイタペ・ホルランジャ

ホルランジャ配置兵站部隊　1700 名

②ホルランジャの状況

海岸地区の兵站各部隊は壊滅。

センタニー湖北側台上の航空部隊兵站部隊は台上に陣地構築し抵抗を企図したが第 6 飛行師団長はパイロット群と共に後退、航空各部隊もこれに続き、兵站部隊も米軍の攻撃に戦線離脱、大部はセンタニー湖南側を経てサルミに向かったのである。

海軍を含むその他の部隊は部隊後方の山地を経てサルミに向かったがな難路の上敵の攻撃により、やむなくセンタニー湖南側を通りサルミに向かったのである。

③ アイタペ方面の状況

当初 20 師団の補充員が抵抗戦闘したが 20 師団に合流の為東方に退避、その他の部隊はバニモの西を流れる川に沿いジャングルの中を南進、アルソーを経てセンタニー湖の南側を西進したのである。

④ 上記全部隊のサルミ行きが如何に難行軍であったか

サルミに到着したのは航空部隊約 4000 名兵站部隊約 1000 名に過ぎなかったことにより十分に察することが出来るであろう。

この様に惨愴極まる残念至極な状況を生んだのは、現地に然るべき戦闘部隊がいなかったからであるが､それは函館から岡山の距離のこの広い戦場に 3 ヵ師団しか与えられなかった事､部隊の機動に時間がかかった事､又このような状況から 4 月ホルランジャ防衛の為戦車装備の南洋支隊をパラオからホルランジャへ送ったがその輸送船が全部敵潜水艦により撃沈させられたからである。

又戦後各地で遺骨収集が行われているが､インドネシアは調査収骨を認めず戦後 76 年経った今日なお調査も行うことが出来ないでいるのは戦死者に対し真に申し訳ない限りである。

(10) 軍主力によるアイタペ攻撃準備

① 米軍の上陸に対する軍司令官の決心と準備

(ア) 当時既にサイパンは占領され、沖縄に上陸し日本本土は敵の空爆の下に曝され、戦局はいよいよ急迫を告げつつあった。

軍は完全に孤立することになったが軍司令官の屈することのない任務達成への責任感と全般作戦寄与の精神に加えて共にこのニューギニアで一命を国に捧さぐべき身が敵との戦いでなく、飢えと病に空しく倒れる多くの部下の姿を見る度に深く心を痛め、同じ死ぬなら敵と戦い誇りある死を与えることが出来ればという可愛い部下に対する男の愛もあったのである。

勿論軍の戦力は全部合わせても 1 ヵ師団にも遠く及ばないが空軍が残した地上各部隊海軍その他の陸上各部隊等を合わせると約 5 万 5 千名がおりウエワクには半定量で 4 か月分の食糧もある。ホルランジャは無理としてもアイタペの敵は何とか攻撃できるとの判断があってのアイタペ攻撃の決心である。

（イ） かくして既にウエワクに到着の 51 師団にウエワク防衛を命じ、20，41 師団基幹の部隊を以てアイタペ攻撃と決め、先行の 20 師団の一部をアイタペ方面に進めると共にハンサ地区前進中の 41 師団も 5 月末にはウエワクに到着した。

【アイタペ作戦開始時の軍司令官訓示】

「猛号作戦本格的攻撃開始に当たり全軍将兵に与うる訓示」

軍はいまや猛号作戦攻撃各部隊をヤカムル周辺の地区に集結し、まさに本格的攻撃を開始せんとす。

おもうに日米戦局はいよいよ重大化し、目下西部ニューギニア、サルミ及びビアク島方面並びに中部太平洋サイパン島において、両軍主力の決戦を惹起しあり。かつ本土の一部も空襲を受けある状況にして､形勢必ずしも逆賭し難きものあり。本職従来の決心の如く、ホーランジアの奪回により、ニューギニア方面における

戦勢を一挙に打開するの方策は今にわかに望み難く、軍は既に東部ニューギニアにおいて絶対不退転の境地に、独立せざるべからざる状況に立ちいたれり。

本職は深く信愛する全軍将兵の心事を憶い、断腸痛心このことにほかならず、しかれども静かに国史を想い、また現下における他方面軍の状況を観るに、遠征の軍としてかくのごとき状況に遭遇する事あえてまれなりとせず。本職はすでに先訓を懐い、さらに不屈の信念を振起し、全軍相率いて皇軍独特の本領発揮に邁進し、もって国史の光栄に副わんことを期す。しかしてその道たるや、要は要地確保持久と敵戦力の破壊とに存すといえども国軍諸般の形勢を按ずるにこれを戦略戦術的に解決すべき合理的萬全の方策を求め得ず。本職はこの難局に処する方策を、国軍多年の鍛錬に係わる軍人精神の教うる道に求めんとす。

いまや敵はまさにアイタペ付近に我が好餌を呈しあり。これ天祐にして軍の有する戦力を最も有効に発揮し、敵戦力を撃滅し得べき絶好最後の機会なり。

もしそれ当初より持久を主とせんか、ついに軍の有する戦力を発揮し得ずして、悔いを千載に潰すにいたらんこと必せり。持久のごときは猛号作戦の余勢をもって実施して足らんのみ、いわんや西部ニューギニアにおいて、国軍主力が死闘しある現下の急迫せる戦況においておや。

すなわち本職はいよいよ意志を鞏固にして､全軍渾身の努力をこの一撃に凝集し、アイタペ付近の敵に徹底的攻撃を加え、これを撃滅してかつは軍の収める戦果により、全軍の志気を作興し、かつは西部ニューギニアにおける友軍の健闘に応えて、急迫せる戦況に策応し、もって皇軍の真価を発揮せんとす。

これ今次猛号作戦の終局的意義にして、本職の誓って達成せんとする宿志なり。諸子はよろしくここに訓示せる挙軍一体、不屈の信念及び皇軍の本領発揮の三大方針をさらに明徴にし、真に挙軍努力の結晶をこの一撃に発揮し、作戦目的の達成に邁進すべし。

これがため攻撃にあたりては、諸子は歴戦必勝不敗の戦士たるの信念と最近数次にわたる諸戦必勝の信念に燃え、ここに教令をもって示せる捨身肉薄必死敢闘連続不断の攻撃を敢行し、とくに戦車に対する必死必滅攻撃、渾身潜入攻撃及び舟艇突入等の目的を達成するに必要なあらゆる手段を余すところなく断行すると共に、後方輸送部隊もまた、ここに訓示せるところにより、堅忍不屈最大の輸送力を発揮し、真に全軍を挙げて手段において余すなく、他日に悔いなき戦闘を敢行するを要す。

それ必勝は各人その任務に渾身の努力をささげ、これに殉ずるにおいて初めて求め得べく、皇軍の弥栄は各人それぞれ皇国の危機に殉じ、悠久の大義と無窮の国史に生くるの道を全うするにおいて、初めて祈念し得べきは、諸子のすでに熟知するところなり。

しかしていまや全軍を挙げて、この関頭に立つ。よろしく必生の努力を傾倒して、皇軍の本領を余すところなく発揮し、悔いを千載に残さざることを期すべし。

（ウ）攻撃準備中の 2 件の非運な事件

㋐ 4 月末ハンサからウエワクに大発 3 隻で航行中の第 20 師団司令部が急襲を受

け、参謀１名以外の師団長以下主要幹部全員が死亡した。

㋑ 5 月初め軍司令部が受けた爆撃により防空壕退避中の軍参謀 3 名と軍司令官副官 1 名と丁度報告の為来部していた第 41 師団長に随行の参謀 2 名計 6 名が同時に死去した。

㋒ 軍は統帥発動以来戦死した主要幹部の補充はその殆どを軍内の人事異動によって来たが、私もこの時軍参謀に補職されたのである。

(エ) 攻撃に当たり重要な問題は第一線に対する食料弾薬等の補給である。4 月以来のウエワクの補給品集積所に対する連日の数十機から百機に近い爆撃と当初ブーツ迄行っていた夜間の自動車輸送が橋梁の破壊と路盤不良の為不可能となった。代わりにウエワクからの輸送を大発によることとした。ムッシュ島の基地から第一夜はウエワクとの往復、第二夜はムッシュ島からソナムまでの輸送である。魚雷艇の攻撃を排除し限られた大発の酷使による頻発する故障を押しての輸送である。

ソナムから坂東川まで 120ｋｍはこれを 15 地区に分け、兵站各部隊航空地上部隊等の７千名と２０・４１両師団による人力担送である。1 人 8ｋｇの荷物を連日夜間往復約 20ｋｍである。

各部隊は飢えと病の多出、更に死亡者の出る中を各隊長を先頭に相助け相励ましての連日の難行である。

まさに第一線の玉砕、後方の玉砕である。

この軍需品前送態勢を統括する為、吉原参謀長を長とする後方司令部を設置し、

私は本作戦の間ここに配属され、連日部隊の激励指導に駆け回ったのである。

(11) 軍のアイタペ攻撃決定までの経緯

① 実は米軍の上陸直後軍司令官のアイタペ攻撃決心の報を聞いた上司 からは次の意見が寄せられたのである。

（ア）第 2 方面軍

全く同意。方面軍は 18 軍の攻撃に対し同時にホルランジャ攻撃を行いたい。

（イ）南方総軍

第 18 軍は統帥発動以来今日までマッカーサー軍攻撃を抑え十二分に健闘してくれた。この際ウエワク地区で持久作戦を行ったらどうか。

（ウ）大本営陸軍部

この際全力を挙げて西ニューギニアに転進し最終防衛線の戦闘に参加できないか。

② これに対する軍司令官の見解

（ア）第 2 方面軍

特別意見なし。

（イ）南方総軍

配慮に対し感謝するが国がいよいよ厳しい状況に直面している時､戦力は減少しているが 5 万人の部隊を遊兵とすることは自分の信念としてできない。

又既にこのニューギニアで戦死した将兵も満足しないと思うし、私自身もこれ

ら将兵に対し何もしないでその儘持久することは良心が許さない。

（ウ）大本営陸軍部

最終防衛線の戦いが心配されるが、現在までの体験から極めて時間を要し、更に途中のジャングルに大部が倒れてしまうことも考えられ、役に立つと思えない。

これらを打電すると共に折から飛来した航空機を利用し小畑後方参 謀を派遣し軍司令官の意図を説明し理解を求めた。

③ 攻撃決定

以上の経緯を経て総軍から容認の命令が来たのは 6 月 17 日であり、同時に軍は総軍の指揮下に入った。

(12) アイタペ攻撃

① 彼我兵力及び配置

我　第 20 師団、第 41 師団、歩兵 66 連隊（51 師団）

極少数の砲兵、海空の支援全くなし

彼　この間に兵力を 3 ヵ師団に増強

配置　坂東川の西側

前進基地　歩兵 3 ヵ大隊

連隊戦闘団 1

砲兵 2 ヵ大隊

飛行場地区　　主陣地　1ヵ師団

アイタペ西側地区　　予備　　1ヵ師団

航空機　60機　海軍巡洋艦20隻

②　7月3日に攻撃開始7月10日の命令を発会

攻撃態勢　正面及び海岸道　237連隊

山寄り　　80連隊、78連隊並列

③ 戦闘状況

（ア）坂東川　川幅150m～200m　水深1m流れ早し

（イ）攻撃開始当初（10日～11日）

10日夜渡河

237連隊　当面の敵撃破　坂東川右岸迄前進一孤立

20師団正面　アフア陣地一時占領　敵反撃で後退

我が砲兵敵の爆弾で全滅

（ウ）16日～24日頃の状況

237連隊　41師団の2回目の脱出攻撃で漸く脱出

当面の敵、7カ大隊に増強

師団主力坂東川近くに推進

軍は攻撃の重点を20師団正面に置き、アフア及び隣接する諸陣地を奪取し戦果を海岸方面に拡張することを企図し66連隊を20師団に配属、41師団はアフア方面に集結、第一線加入を準備。

20 師団の各部隊はアフア陣地を占領確保した後次の陣地に向い両軍共に奪ったり奪られたり更に敵に後方を占領されたり、真に死闘を繰返した。

（エ）8 月 30 日までの状況

30 日には 41 師団の 238，239 の両連隊も戦闘に加入、同様に奪ったり、奪られたりの激闘を展開、逐次戦果を拡張しつつあったが、全部隊の戦力いよいよ限界を超え更に補給すべき少量の食糧も遂に底をつくに至り 3 日アフア地区の第一線で指揮を執っていた軍司令官は 4 日正午を以て作戦を打切り 5 日朝以降後方に撤退開始を命じたのである。

（オ）アイタペのこの 20 日余りの戦闘は世界の戦史上何処にも見出すことが出来ない真に鬼気迫る激闘であったのであり、心からの尊敬を申し上げたいと思うのは、私 1 人ではないであろう。

④ 本作戦によるわが損耗

（ア）第一線部隊

78 連隊	中隊長全員戦死
	残存兵力 3%
80 連隊	残存兵力 5%
238 連隊第 2 大隊	残存兵力　兵 9 名のみ
239 連隊第 2 大隊	殆ど全滅
60 連隊第 2 大隊	残存兵力　兵 150 名

（イ）両師団　　約 8000 名

（ウ）後方担送部隊　　約 5000 名

※　米損耗　約 3000 名

(13) 迎撃態勢への移行

① われの 7 月 10 日攻撃に対し米軍もそれぞれ 2 ヵ連隊を以て南北の二手に分かれ攻撃を開始し、爾来彼我入り乱れての激戦が続いたが、7 月 30 日頃から日本軍の後退を予測しその退路等遮断の為、4 ヵ大隊を以て進軍、これに対してわれも一部を以て対応しこれを阻止する戦闘が 8 月 5 日まで続いたのである。これ以外は米の追撃に会うことなく各部隊は示された場所に向かったが、各部隊共指揮官以下多くの将兵を失いしかも食糧なく、疲れ切った身で重傷者を仮設の担架に乗せ、互いに励まし助け合って険峻な山坂を越え無数の川を渡り、山を越えての行軍である。

特に食糧なくサゴ椰子の木部を生の儘かじり、蜥蜴も飛蝗も食べ尽くされ先発隊が残していった人糞にたかる蛆や蠅を口にしての行軍である。

従って体力益々低下、行軍中の部隊から遅留兵脱落者が出たり、食を求めてフラフラと彷徨う者、その儘路傍で動くことが出来ず息を引き取る者、何人かで党を組みこれらから服や靴を取り、これらを襲い殺してその肉をそいで食べる者も出て、軍は一時食を求めて巷を彷徨う人の群れとなったのである。

この状況に対し軍司令官は責任を取って今死にたい、いやこの状況を放置して

死ぬのは無責任だと悩まれた後、自らが先頭に立ち参謀全員と共に次々とこれらの救済と非行取締り等を一々措置され在ウエワクの各部隊もこれに協力、又自ら大酋長カラオに対し特に地域全住民による食料の補給や収容について協力を要請、カラオがこれに応えて強力な支援をしてくれたのである。

かくして一時混乱状態にも瀕した軍も 12 月末にはそれぞれ所定の地区で逐次体力を快復邀撃態勢に移ったのである。

③ 邀撃作戦の開始に当たり軍司令官は、軍が完全に孤独になりともすれば絶望に陥り易い将兵の精神を戻し、飽く迄軍司令官師団長等の指揮官を核心とする統率と団結確立を図り最後まで光輝ある第 18 軍として行動することの重要性を痛感し、まず訓示により個人部隊としてのあるべき姿を説いた。

それは統率の確立即ち厳粛な指導権の履行、規律の厳守と強固な団結の重要性であり、更に戦友魂の高揚軍人の最後の心構えの大切さを説き、今後も戦闘を以て行動の基準とし邀撃のための戦力の増進を創意工夫せよというものである。

(14) 邀撃作戦

① 12 月中旬米軍と交代した豪軍第 6 師団の 1 ヵ連隊戦闘団が海岸地区最前線で軍の邀撃態勢移転の転移の掩護に当たっていた青津部隊を攻撃して来た。

邀撃作戦の開始である

豪師団は 100%充足の上にパプア族を動員した 2000 名と砲数 10 門、整備済のホルランジャ・アイタペ飛行場を基地とする航空機数十機それに戦車舟艇巡洋

艦等に対し、われは 20，40 両師団合せて自動小銃のみの 2800 名である。

12 月下旬には山南 41 師団正面でも 1 ヵ連隊戦闘団と土民軍が攻撃を開始してきた。

軍は逐次後退する青津支隊に対し兵力増加、支隊はこれを以て反撃攻撃を行ったが不成功に終わり、第一線は第 20 師団展開のブーツ地区にまで至り、更にその南方の山中の部落にまで浸透してきた。

一方山南の 41 師団も逐次攻撃を受け、一歩づつ後退を続けた。

③ 軍は 20 師団から 78 連隊を基幹とする三宅支隊をしてミラクを占領させ 41 師団正面の遅滞を抑えると共に 20 師団を相連携させることを主目的にこれに 51 師団の選別した 1 ヵ中隊や海軍陸戦隊の柿内部隊（300 名）等を増加、軍司令官自ら三宅支隊長に懇切な指示を与え、3 月初め攻撃させたが残念にも成功せず、爾後三宅支隊はその東方地区の防衛に当たった。

③ 3 月中旬軍司令官は更に訓示を発し、最後に処する行動について心からの要望を示されたのである。

【邀撃作戦開始時の軍司令官訓示（20 年 3 月 18 日)】

比島及び硫黄島方面戦局全般の推移に鑑みるに、帝国軍の主力は堅確にして且つ壮烈なる決意を以て、日満支を基盤とする最終的決戦を整え、今や虎視眈々として米軍主力の来攻を待ちつつあり。

又南海ニューブリテン島、及びブーゲンヒル島に豪軍の来攻あり、当軍四周におけ

る旧臘（前年の 12 月）以来の敵の策動また愈々本格的となり、豪軍主力を以てするウエワク攻略企図茲に明白化し、処は南北遥かに隔つと雖も、殆ど時を同じくして日米豪全般の戦局は、愈々最後の決戦段階に立至れり。

本職は、茲に規定計画に基づき、断乎邀撃決戦を敢行せんとす。決戦敢行の道に就いては、諸官多年の鍛錬に係るところにして、諸官それぞれ信ずるところあるべしと雖も、作戦目的の貫徹に些かの遺憾なからしめんがため、更めて重要事項に関する本職の所信を披瀝し要求する所あらんとす。

1. 現地自活の基礎樹立の観念を一擲し、邀撃決戦敢行の心構えに急速に転換するを要す。現地自活の泰平的気分の為、戦闘に方り不覚をとりたる例尠なからざる実情に鑑み、諸官は宜しく先ず指揮下部隊の戦備特に精神準備を確立せしめ、併せて諸施策及び訓練をしてこれに副わしめ急速に邀撃決戦態勢を確立せんことを期すべし。

2. 軍の本領発揮就中、最後の敢闘及び処決に関する指導を急速に具体化し、これを徹底せしむべし。これがため本職の庶幾する目標は、「健兵は三敵」「病兵は一敵」「重患者と雖もその場に戦え」を最小限の目標とし「動き得ざるものは刺違え」「絶対に虜囚の辱を受くる勿かれ」を最後の処決とする五項目なり。

なお患者の取扱に関しては、先に下せる訓令の目的精神に準拠すべし。是れ共に部下に対する最後的大愛なるの趣旨に鑑み、愛を母体とする統率の下、真摯的確なる指導監督を以て臨み、部下をして真に軍人の本領を発揮するに遺憾なからしめんことを望む。

それ軍は遠くはブナよりマダンに亙る至難なる作戦を敢行し､近くはアイタペ作戦に挺身し、なすべきはなし、尽くすべきは尽くし、今や満身是れ瘡痍なりと雖も、なお一片耿々の志存するあり。保有する物的戦力また数万の敵を殪すを不可能なりとせず、就中挺身斬込、敢闘必殺の攻撃は、軍が全軍に魁けたる伝統の戦法なり。茲に改めて猛然たる闘志を振起して敵を殪し、潔きを剣電弾雨の裡に求む真に男子の本懐と謂わざるべからず。況んやこれ作戦目的を完遂して軍有終の美を収め、且つは皇恩に、酬い奉り且つは、陣歿幾多の英霊及び他方面における幾多友軍の玉砕決戦の敢闘に応うる所以なるにおいておや。

諸官は愈々士気を旺盛にし真に挙軍一体不屈の信念をもって邀撃決戦を敢行し作戦目的の完遂に邁進せんことを期すべし。

右訓示す。

④ 敵は砲を進めるための道路を作りながらの攻撃で一歩一歩前進、に対し我は、昼間は陣地におり、時には小部隊を以て反撃、夜間は残塁した砲弾から抽出した爆薬を以て敵の幕舎や砲陣地に挺身進攻撃を繰返しての防衛戦である。

軍は両師団の兵力を補充するため軍直轄諸隊例えば砲弾のなくなった砲兵・高射砲・高射機関砲・迫撃砲部隊、油がなくなり故障で動けなくなった艇部隊等を以て、第一線部隊のための陣地を作ったり、両師団に配属し第一線戦力の補強等に資したのである。

各師団長はこれらの部隊を各連隊長の指揮に入れ、連隊長は自ら直轄にしたり、

大隊等の戦力強化に資したのであるが、これらの部隊は少数の軽機関銃と小銃を以て第一線の戦列に加わったのである。

更に損耗戦力低下の第一線の人員強化の為、兵站各部隊や航空地上諸隊も病院や一部の兵站部隊を除き全て第一線に投入、軍は全将兵が師団長連隊長の指揮下に入り敵の攻撃の矢面に立って戦ったのである。

⑤ 海岸方面の敵は陸行及び艇を利用し逐次東進､5月1日遂にウエワク半島に至り、猛烈な空爆及び砲弾を以てこれを奪取更に艇を以て東飛行場東方に 2 回に亘り上陸、引続き 2 ヵ連隊戦闘団を以て中飛行場に主力を集中、洋展台占領後その南方地区を逐次攻撃し南下。

われも第 39 自動車・航空第 25 基地大隊を以て一山一山奪われたり奪い返したりの激闘を繰返しつつ逐次後退、敵は遂にアレキサンダー山脈の頂上部まで達したのである｡かくして軍は遂に西方及び背後から直接圧迫されるに至ったのである。

⑥ この間軍司令官は何度第一線まで、もうこの段階では激励とその労に感謝する為に行かれたことか。年齢 55 歳、70ｋｇ以上あった体重も 50kg を割るまで低下それに持病の脱腸の腸を手で押し込みながらの徒歩行である。頭に白髪が増え顔は皺だらけである。途中遭う将兵に一々暖かな声をかけての山を越え、川を渡り、途中住民の小舎に泊まっての第一線行である。途々あちこちから聞こえてくるのは「誰か故郷を思わざる」の歌である。

勿論これより先軍司令官は賞罰権その他を師団長に委託され、作戦指導についても各師団に任して発言することもなく、唯全将兵の活動を心から感謝しつつ最後

の時を考えておられたのである。

⑦ そして玉砕命令を出されたのは 7 月 25 日である。

色々と検討の結果、北方に戦闘中の 3 個師団を中心とする部隊を第一段玉砕部隊として軍司令部の指示する最終防衛線で戦力の限界と判断したら、食料のなくなる 9 月末までに玉砕。セピック海岸の部隊、東南方防衛中の 51 師団の部隊を第 2 段玉砕部隊として吉原参謀長指揮で対処するという計画である。

そしてこの命令発会後軍旗を各連隊長の下に返した。

【玉砕命令】

猛集団命令（7 月 25 日 0.800 ヌンボク）

1. 皇国を中心とする戦争全局は真に深刻化し、一時的方便を以てしては断じて収拾を許さず。皇国は興廃を賭して国家全体を挙げて本土決戦完遂に徹底し、敵国全般の企図を挫折せしむると共に、如何なる場合に於いても国家悠久の生命及び名誉を確保せんことを期しあり。此の祖国の難局に処し軍の任務を達成するの道は、軍多年の鍛錬に係る軍人精神に基づき、只管没我献身祖国に策応して敢闘に徹し、玉砕以て軍としての悠久の大義を確保するに在り。

軍当面の敵は依然主力を以て我複郭の占領を企図しあること確実にして、又セピック周辺の作戦的価値は、其具体的給養力及び作戦遂行上の地形的利益の寡少と共に、軍主力決戦の為価値十分ならず、軍の具体的任務達成の為の決戦場は、現複郭陣地を捨て他に求め難し。

2. 軍は茲に愈々決意を鞏固にし、主力を以て依然現複郭陣地帯に於て、更に長期に亙り敢闘に徹し状況極度に逼迫し各種戦力亦尽くるに至れば、軍司令部を中心とし概ねヌンボク周辺の地区に於て玉砕し、以て軍に負荷せられなる具体的任務の大部を達成し、祖国の難局に殉じて真に軍の本領を発揮せんとす。複郭地帯に於ける軍主力決戦計画の大綱別紙の如く別にセビック水域諸部隊は軍参謀長吉原中将を長とする兵団に結成し、概ね独立して玉砕を期し、複郭地帯と同時又は第2段の邀撃決戦を敢行し軍の一部の任務を達成せしむ。

3. 第20師団長は自今ツル山を支撐としモンブック、ホイ地区及びフバール、ヤンゴール地区を経て概ねヌンボルオン、ウインチョン、ホーロクの地区に亙る線を師団の最終線地帯とし、当面の敵に対する邀撃を敢行すべし。

特に現複郭後縁たるカボイビス、エバノブ、ヌンビーフ地帯と最後線地帯との中間邀撃地帯の運用の適正及戦法の改善に依り極力敵に与うる殺傷の増大を図るべし。

4. 第41師団長は自今ホイン、サーレ、シンリ、ホイ、センギリ、ヌンボミヤ、メルコンビ（第2バイムル）地区を師団の最後地区とし、当面の敵に対し極力其前方地域に於て軍主力最左翼の邀撃を担任敢行すべし。又最後地区の第一線たるホイン、サーレ、シンリ地区に連繋を確保すると共に、特に戦法の改善に依り敵に与うる殺傷を極力増大すべし。

5. 両兵団長は爾今愈々連繋を密にし、作戦地境附近の邀撃線の変換等に伴う協同作戦に遺憾なからしむべし。協同作戦の主軸兵団は、第41師団とし、第41師団は

ガリップ、ブキワラ、ウインゲ、チャイゴール地区を依然最小限度概ね 8 月末迄確保すべし。

6. 第 51 師団長は依然現任務を敢行すべし。

7. 各師団長は別紙に準拠し、最後線地帯の邀撃を最小限 9 月末迄敢行継続すべし。又各師団長各部隊長は、隷下指揮下部隊をして玉砕に臨む最後まで、不屈不撓の敢闘精神及最後に於ける操守を堅持し皇軍の本領発揮に些の遺憾なからしむべし。

猛部隊長　　安達中将

猛作命甲第 371 号別紙

軍主力決戦計画の大綱

【方針】

軍主力は依然現複郭陣地帯に於て更に長期に亙り敢闘に徹し、状況極度に逼迫し各種戦力亦尽くるに至らば、軍司令部を中心とし概ねヌンボク周辺の地区に於て玉砕し、以て軍に負荷せられたる具体的任務の大部を達成し、祖国の難局に殉じて真に軍の本領を顕現す。

【指導要領】

1. 各兵団最後線を若干収縮し長期決戦を可能ならしむると共に戦法の改善を推奨す。これが為第 51 師団最後線は概ね現状通りとし、第 20 師団最後線はツル山を右翼の支えとしてホイ、フバール（ヤンゴール地区を含む）ヌンボルオン、ウインチョン、ホーロクの線、第 41 師団最後線はホイン、サンレホイ、センギリ、シンリ、

スンボミヤ及びメルコンビ（第２バイムル）の地区に設定せしむ。

2 最後線前方及び最後線の邀撃は爆弾糧食の存続する限り極力永く敢行するものとし９月末までを以て最小限の目標とす。

3. 最後線の戦闘に於て状況極度に逼迫し且各種戦力亦尽きんとするに至らば、軍主力を現軍司令部位置たるヌンボク周辺の地区に集結して一団となり、最後の決戦を敢行し玉砕す。

4. セピック地区より給養資源を取得し且、一部兵力の転用を掩護し複郭地帯の戦闘を容易ならしむると共に、セピック兵団の北面邀撃線の設定を掩護する目的を以て、軍主力全般の最後線の東西両翼に連繋する地域に於て、セピック地区との連携を極力保持するに努む。

5. 不屈不撓の敢闘と最後の操守を堅持し、軍の本領発揮に些かの遺憾なからしむる為、皇国を中心とする戦争全局の推移と、これに処する軍任務達成の道を明徴にし、全軍将兵の決意を固めしむると共に、各級指導官の純正鞏固且愛情に発する指揮統率及建制の確保により、各部隊鉄石の団結を確立強化せしむ。

Ⅳ.　終戦

わが安達閣下率いる第 18 軍は統率発動以来 3 年間、終始敵の制空制海権下 3 ヵ師

団基幹部隊を以て全期間食糧初め一切の補給なく、又海空の支援も殆ど無き中を、あらゆる困難障礙を克服して戦い抜き、主として圧倒的な戦力のマッカーサー軍を1年半も軍正面に拘束したのである。

しかもこの間、戦力低下する師団をその装備をなくした各種部隊を以て補填し、最後は航空地上部隊や兵站部隊もこれに編入、彼等は警護用の小銃を持って各師団長の下歩兵連隊の第一線に立って戦ったのである。

第18軍は他の戦場では見られない、かつて帝国陸軍が味わったことのない長期間に亘る奮闘を全員が軍司令官以下各部隊長の下真に一心一体となり整然とその指導体制を堅持し、玉砕寸前まで整然と戦い抜いたのである。

この軍に対し総軍司令官は未だ先例のない感状を授与したのも 3 年間苦闘の中を整然と指揮組織を堅持し、堂々と戦い抜いた全将兵に対する名誉ある賞状なのである。

その後8月8日突如敵1ヵ大隊が20、41師団の間隙を衝いて最終防衛線と予定した内側のヤンゴールに侵入。

軍は管理部長をして軍司令部内より人員を集め、これが攻撃を準備中、8月 14 日の日本降伏の敵軍のビラに次いで8月15日、遂に終戦の詔勅となったのである。

【8月15日以降の状況】

(1) 昭和19年1月以降の戦死者　約1万7千名

(2) 終戦時の兵力

20師団　　1711名

41 師団　　1147 名

51 師団　　4311 名

セピック兵団　　2619 名

海軍（カイリル）　1230 名

その他　　2237 名

合　　計　　13255 名

(3) 降伏式　　9 月 17 日　　於　ウエワク　オウム岬

① 8 月 16 日豪州軍特使がヌンボクの軍司令部に至り、降伏式及び今後の日本軍の行動について協議実施を申し入れるも、軍司令官は方面軍司令官の命令のない現在、これに応じる事は出来ないと拒否した。

② その後、降伏式はウォーム飛行場、続いてウエワクの豪軍司令部で協議するが、部隊はポイキン及びウエワクの 2 ヵ所から乗船、部隊の武装解除は乗船時に行い、全部隊ムッシュ島集結を、豪軍が指示。

③ 方面軍降伏命令受領　9 月 14 日

④ 9 月 16 日朝、軍司令官、通訳、杉山田中堀江参謀、森本副官随行、徒歩でヤンゴールへ。そこからジープでマブリックへ行き一泊。よく 17 日朝ウエワク飛行場へ、その儘ジープで式場へ。

④ 式場周辺は豪州兵が徒列、師団長の前迄、軍司令官その後方に随行者が 1 列に並び前進、まずそれぞれ軍刀を渡し、軍司令官降伏書に署名、式場を去る。この間、全く静寂、ジープで出発時少数の拍手。

⑤ 両幕僚間でムッシュ島集結について各種協議、私は単独で第 51 師団司令部に行きムッシュ島集結の命令を伝え、その儘豪司令部に引き返す。翌日ムッシュ島に先行し、所在の船工部隊等の協力を得て 4 日間かけて島内を廻り、各部隊の駐屯地を決定した。軍司令官以下は一応軍司令部に帰着。

(4) ムッシュ島集結　　9 月　～10 月中旬

各部隊は指定した場所に仮屋を建て、畑作をしつつ体力回復、帰国準備。

当初主食は豪軍携帯口糧 1 日 2 食分。

部隊の集結後今村第 8 方面軍司令官から海上トラックに新しい軍服等を送って頂いた。お陰で全員みじめな姿ではなく、胸を張って帰国することが出来たのである。有難き極みである。

(5) 両軍連絡所の開設

両軍連絡所を船着場付近に開設

所長　堀江　豪　コーリー少佐

① 病院用薬剤、注射器等を 9 月初め要請し、9 月末受領

② 主食米要請 9 月末、10 月中旬以降米食

③ 対外工事実施。双方規模短期を提唱し、2 週間 500 名で実施。

③ 軍司令官の軍刀隠匿疑惑事件。鈴木大佐認定（先方、了承）

総じて戦後の豪州側の我々への取扱いは温かく、他方面にない本来の部隊組織の儘、帰国までその統一指揮を認めたのも戦争中の我々の奮闘に対する深い敬意さえか

んじられ、真に感謝に堪えない。

(6) 帰還　　11 月末～ 1 月末

① 20 年 11 月初めより 21 年 1 月まで、数回に亘り巡洋艦・商船・氷川丸航空母艦を以て浦賀・大竹に全員帰還。

最初は台湾、成合大尉軍全員

本島人は基隆到着とともに帰家、高砂族は台北まで行き解散式まで行ったのである。

各部隊は到着と共に各人階級章を外し部隊を解散、夫々帰宅又は入院。

帰還途中、船内で死亡する者少なからず、一同涙を流しこれを弔ったのである。

② 各部隊は解散にあたり、部隊世話人を残留、当初浦賀元通信学校、次いで伊豆伊東で吉原参謀長の指揮下、各部隊の出征以来の行動・戦死者状況等を書き、逐次解散、期間約 1 年間

(7) 終戦～帰還迄の死亡者　　3350 名

(8) 内地への帰還者　　10072 名（昭和 20 年 11 月～21 年 3 月）

Ⅴ． 過酷な状況下で長期間に亘り整然と戦うことが出来たのはどうしてか

第一は、安達軍司令官の存在

第二は、終始軍参謀として活躍された杉山、田中両参謀の存在

第三は、各級指揮官以下全将兵の指揮掌握と忠誠心

第四は、原住民の献身的な協力

1. 軍司令官安達中将の経歴とそのお人柄及び統率方針

（1）中将の経歴とお人柄

明治 23 年陸軍教授の 13 名の兄弟姉妹の第 5 子として出生、中央幼年学校から陸軍将校の道に進んだ 22 期生、近衛歩兵第 1 連隊付で任官、少尉中尉の一時期昭和天皇の東宮時代の軍事教練の指導に任じ、その後、陸大卒業後は、鉄道分野を担当して、参謀本部及び関東軍に勤務し、支那事変では丸亀の歩兵連隊長駐蒙の歩兵旅団長、北支の第 37 師団長と第一線指揮官として活躍、次いで北支派遣軍参謀長となり昭和 17 年 11 月第 18 軍の編成と共に軍司令官に補職された。

勿論優秀でそれぞれの職務を立派に果たし、特に猛連隊長、名師団長として大きな評価を得ておられたが、何方かというと余り目立たない地味な存在であった。当時 52 歳、身長 170ｃｍ、体重 75ｋｇ。若い頃から禅宗に皈依されると共にキリスト教を深く研究し、その上戦場でも軍人勅諭を奉唱されたり、謹写されたり、ふと見ると歴史書や論語、聖書、自然科学（種の起源）その他人類学、天文学、哲学等実に幅広い本を読まれたりする姿を、静かに沈思黙考し作戦構想等を書留めたりしておられる間に拝見したのである。

長女の祥子さんが歌人であった関係からか、自ら「じゃんぐる詠草」と題し、その時々の和歌や漢詩を書留めておられたが、これは戦後ムッシュ島で、祥子

さん死去の報を聞かれ、焼いてしまわれた。尚、奥様は昭和 17 年 11 月日本出発直前に死去された。

その性格は、意志強く如何にも男らしく、悔しいとか残念とかの言葉は聞いた事がなく、他人に同情されるのと、弱音泣き言が嫌いで、非常に我慢強い自らに厳しい人であり、部下には総じて優しく、あの人は駄目だといった批判がましい言葉は一切なく、特に親補職である師団長には、態度言葉共に極めて丁寧に接しておられたのが強く印象に残っている。

歌舞音曲は駄目だったが、時に冗談や昔話をされ、軍司令官の居られるところは何時も何となく暖かい雰囲気で、如何にも人間味のある慈味溢れる人であった。

(2) 統率方針

① 純正強固な統率

② 鉄石の団結

③ 至厳の軍紀

④ 旺盛な攻撃精神

⑤ 実情に即応する施策

この統率方針のうち②から④は部隊指揮官として当然のことであるが、その特色は①と⑤にあり、更にこれらを全般作戦寄与と愛の精神と承諾必謹を以て貫かれたのである。

(3) 基本姿勢

戦いについての基本姿勢は、「戦いは一期一会」である。一度負けたら終わりである。だから一戦一戦全力を尽くすとの事であり、軍司令官の頭の片隅にも功名手柄というような言葉はなかったのである。

そして、部下あっての自分であるという考えで自らを律しておられ、作戦開始時だけでなくその結節時には危険な敵の制空権下を何度も師団長の所に行かれ、常に軍司令官として打つ手等につき誤りなきを期せられ、その作戦の成果については全て自らの責任とされたのである。

統率発動以来の軍司令官の行動等の内容の一端は既に述べたが、真に猛将智将であると共に愛情深い将軍であり軍の全将兵が真に一体となり光栄ある日本帝国軍隊としてその最後を全うすることが出来た理由の第一は間違いなく安達軍司令官の存在にあった。天は将軍をこのニューギニアの作戦を主宰さす為にこの世に生じさせたのではないかとさえ思うのである。

(4) 終戦後の軍司令官

① 前述した終戦前日のビラを観られた時「我々はこんなビラに迷わされることなく最後まで戦い抜くのだ」と決然と申されていた司令官は終戦の詔勅を謹んで拝聴され、北を向いて深く頭を下げ「私の努力足らずこのような事態となりました事は誠に申し訳なく、心よりお詫び申し上げます」と静かに申された後、暫し黙祷そして「これからは唯々御詔勅を奉じ全員が無事帰国できるよう皆で力を尽くそう」と申され、爾後敗戦について悔しいとか残念だとかを口にされることは全くなかったのである。

② ムッシュ島に集結後まず指示されたのは病院を作り患者を収容することと慰霊祭の実施であった。司令官自ら太い柱に「遺芳千秋」と書かれ、これを中心に各部隊長集合心からの慰霊祭を執行、その後再三に亘って病院の見舞いや各部隊宿営地を廻り隊員を激励されたのである。

そして帰還が始まるとその都度隊員に対し一人一人の顔を見ながら戦争中の苦労を労らわれ心からの謝意を表されると共に全員に「直ぐ家に帰りたいであろうが、全員病人だからまず入院し元気になってから帰ってくれないか。それから亡き戦友の慰霊遺族の弔問を私に代わってしてくれないか。その後元気になったら国の復興に頑張り又出来れば遺骨収集もして貰えれば有難い。」と親が子に話すよう各人の顔を見ながら静かに申され、そして舟艇に乗る部下一人一人に頭を下げて見送り更に本船上に上がる迄じっと立ち尽くして見送られたのである。

③ 12 月末にはラバウルの戦犯収容所に出頭を命じられ田中参謀が随行したが、痩せ衰え痔瘻の痛みに堪えながら一人で昼間黙々と命ぜられた畑で水桶を担ぎ鍬をふるっておられたが、同じ収容所に収容されている若い連中がこれを見つけ、軍司令官の下に集まり一緒に畑作りに励む等の他真の親子のように親しく心を通わせておられた。

その部下達はインド兵の部隊の隊長将校達でありマレー作戦で英軍の一員として戦いその後インド独立軍の友軍となりニューギニアにも派遣され兵站業務に服していたが終戦と共に豪州軍にわれわれ捕虜に食糧も十分に与えられずに虐

待されたと訴えたために収容された連中であり、戦争中は軍の全員が食糧難で苦しめられたのであり且つ彼らは捕虜ではなく友軍であったのである。

軍司令官は、彼らの裁判の度に弁護に立たれその辺の事情を説明すると共に食糧難については彼らが責任を問われる筋合いはなく強いて罪ありとすれば、それは軍司令官である自分が負うべきものであると心を尽くして弁護されたのである。

④ そして昭和 22 年 2 月 23 日、ご自分の裁判で責任者として終身禁固刑を受けた当日、北面し小刀で型の如く腹を斬った後両手で頸動脈を押さえ自決され 56 歳の生涯を終えられたのである。

遺骨は本人の希望通り今村大将お立会いの下、ラバウルに埋葬され、幾万の部下と共にニューギニアの地に永遠の眠りにつかれたのである。

その遺書は次の通りである。

【今村大将・上月中将宛の遺書】

昭和 17 年 11 月第 18 軍司令官の重職を排し、彼我戦争勝敗の帰趨将に定まらんとする重要なる時機に於て皇軍戦勝の確保挽回の要衝に当らしめられ候こと男子一期の面目にして有難く奉存候。

然る所部下将兵が万難に克ちて異常なる敢闘に徹し上司亦全力を極めて支援を与えられしに拘わらず小官の不敏能く其使命を全うし得ず皇国今日の事態に立到る端緒を作り候こと罪洵に万死足らず恐入奏候。又此作戦 3 歳の間十万に及ぶ青春有為なる陛下の赤子を喪い而して其の大部は栄養失調に基因する戦病死なること

に想倒する時御上に対し奉り何と御詫びの言葉も無之候。

小官は皇国興廃の関頭に立ちて皇国作戦寄与のためには何物をも犠牲として惜しまざるべきを常の道と信じ、打続く作戦に疲労の極に達せる将兵に対し更に人として堪えうる限度を遥かに超越せる克服敢闘を要求致候。之に対し黙々之を遂行し力竭きて花吹雪の如く散り行く若き将兵を眺むる時君国の為とは申しながら其断腸の思いは唯神のみぞ知ると存候。当時小生の心中堅く誓いし処は必ず之等若き将兵と運命を共にし南海の土となるべく縦令凱陣の場合と雖も渝らじとのことに有候。一昨年晩夏終戦の大詔続いて停戦の大命を拝し、此大転換期に際し聖旨を徹底して謬らず且は残存戦犯関係将兵の先途を見届くることの重要なるを思い恥を忍び今日に及び候。然るに今や諸般の残務も漸く一段落となり小官の職責の大部を終了せるやに存ぜられるにつき此時機に予ての志を実行致すことに決意仕候。即ち小官の自決の如き御上に対し奉る御詫びの一端ともならずと思う次第にて唯々純一無雑に陣歿、殉国、竝に光部隊残留部下将兵に対する信と愛に殉ぜんとするに外ならず候。小生の此処置に伴い陛下竝同僚各位に御迷惑をかくること尠なからずと存候えども何卒小生の微衷と諒せられ御海容あらんことを希奉候。

又小生には 2 残務ありと存居候。

1. 復命

軍状奏上については両陛下御願申上候。

材料は田中兼五郎中佐に準備致さしめ置き候(直隷軍司令官のみ文書奏上のことを聞きしを以て)

2. 陣歿、殉国将兵の遺族救護の件

この点に関しては真に万斛の憂を懐きあり自ら渾身の努力を致すべき筋なるも能く果たしざるにつき何卒従前に引続き宜しく御願申上候。

以上２件甚だ勝手乍ら切に御願申上候。

明治の聖世に生れ国家興隆潮に乗りて壮年を過し、しみじみ皇国の有難さを身に徹し候。皇国を此姿に還しさらに今回蹉跌せし大経綸を達成せん日の速ならんことを一意念ずる次第に候。

戦後自らの責任を執り自決された将軍は何人も居られるが、戦後２年も死への思いを断ち、戦後なすべきを尽くし切り、自決された将軍は軍司令官お一人だけである。

2. 杉山茂高級参謀（初代作戦主任）と田中兼五郎第２代作戦主任参謀（当初作戦補助）の存在

お２人は軍の編成当初から最後までお元気で軍司令官の側近として仕えられた。

共に極めて誠実かつ優秀で同室に起居していてお 2 人が如何に心を許し合い信頼の絆で固く結ばれ共に常に軍の現状を把握しその将来を案じ合い、なすべきことを考え、これらについてお互い話し合われる姿を拝見したのである。

時には堀江君このことをどう思うかと若い参謀教育のためお声をかけて頂くこともあった。

軍司令官は居室でお一人の時は朝は食後勅諭を謹書されたり小さな声で奉唱されたり宗教書や歴史書を読まれている姿をよく拝見したが特に当初は沈思黙考さ

れ時々メモにされる姿をよく見かけた。

軍司令官も軍の現状これからのとるべき方向今なすべき事柄等をお考えであり、時にはお二人で軍司令官に直接進言することもあり又軍司令官に呼ばれてお示しを拝聴することもあった。

時に私もお 2 人の後に従ったが、示された内容や進言する内容は殆どが 3 人で十分に考えていることであり、従ってそれぞれ若干の意見は出るが多くの場合そこで結論が出されそのまま実行を命ぜられることが多かった。

そしてその夜は部屋の片隅の机で蠟燭の灯の下で鉛筆を噛みながら作業される田中参謀の姿を見たものである。

軍司令官と真に一体のお2人の存在が各師団等の上級幹部の軍司令官に対する信頼を確実たるものにすると共にお 2 人の各部隊特に上級幹部等に対する丁寧かつ穏やかな行き届いた説明等がこれを助長したことは言うまでもない。

3. 指揮組織の保持と各部隊長の的確な部下掌握と全将兵の忠誠心

各師団長は最後まで軍司令官と真に心を一つにしておられた。

損耗による急速に戦力低下する第一線戦闘兵力を､補充する弾薬尽きあるいは主要な装備を失った各部隊更に最後は航空地上部隊や兵站等の後方部隊までも全将兵を各師団に配属したが、師団長はこれらを一部直轄にし大部は 3 ヵ歩兵連隊の指揮下に入れ基本的組織を堅持した儘最後まで奮闘されたのである｡各部隊長はこれら自衛用の小銃を持っただけの全く第一線戦闘能力も経験もない部下を的確に掌握しこれら全将兵は人間の堪える限度を遥かに超越した環境の中を最後まで忠誠

心に燃え家族や故郷の上に思いを馳せながら闘志を掻き立て整然とお互い励まし合い、助け合いながら戦い抜いたのである。

尚、後方要員として配属された台湾の高砂族の一行が、中野学校出身の大高、斉藤、佐藤、成合大尉等の教育を受け、挺身隊としてフィンシハーヘン作戦以降最後まで常に最も重要かつ困難な戦場に投入され真に立派に戦い抜いた功績は絶大で、日本人として決して忘れることなく、真に感謝し賞賛すべき存在であることを特記したい。

4. 原住民の積極的な協力

当時の人口は 60 万名といわれカナカ族は北岸沿いにパナマ族は南岸沿いに居住。従って我々と接した原住民はカナカ族であり、全部で 300 部族 300 言語があるといわれ、共通語としてピジン語はあったが、全員無学文盲で 10 から上は全部プランテイであった。

部落間の闘争は 1 件も見なかったが、セピック地区を除いて全員体躯大体小痩せであり男は腰にラプラプ女性はプルプルを着けているが上半身は裸、子供は丸裸で、もちろん全員裸足である。

彼らは概ね全域さと芋ヤム芋を主食としウエワク地区以東ではサゴ椰子澱粉（生育したサゴ椰子を切り倒し木部を叩いて水濃した澱粉）を主食とした。

若い男は酋長に属しジャングルを伐開して畑用地を作るのと野豚等の狩猟が任であり若い女性は酋長の下で畑を作り芋類を植え管理するのとその他の管理が任であり食事は女性の作った芋類を給与されるのである。

作戦全区域の内地方行政の中心であったウエワクとマダンの極く一部を除き真に未開であるが平和な生活をしていた。これら現地の人々の生活を根本的に破壊してしまったのである。

にも拘らず彼らからあれこれと凡有る面で最後まで苦情を漏らす者もなく気持ちよく助けて貰ったのである。

大切な畑を荒らすのを見ながら黙認、サゴ椰子澱粉の提供、その作業の手伝い、ヨタヨタ前進中の兵の荷物運搬、兵を背負っての渡河、行倒れた兵の収容看護、部落に入った部隊の宿舎の提供建築、駐屯部隊の水汲み、その他の雑用の実施、邀撃作戦最後の段階におけるセピック地区で作成したサゴ椰子澱粉の第一線部隊への輸送供給。唯々ありがたい、我々に対する支援である。

これがなかったら 1 万名もの将兵も恐らく帰国することは出来なかったと思われてならない。

戦後 28 年昭和 48 年遺骨収集に行った際、ウエワクで戦時中軍司令部で水汲みをしてくれていた当時小政と呼んでいた青年に会った。抱き合って再会を喜んだ後「戦後 28 年豪州に色々と施策して貰いこの様に電気・水道もつき家も道も良くなり、店も出来、マラリア蚊もいなくなった」と心からの喜びを申し述べたのに対し、彼は静かに「豪州はフレンドで日本はブラザーだ」というのである。「あれだけ皆を苦しめた日本がブラザーでこれだけ良くしてくれた豪州が単なるフレンドとはどういうことか？」というと「それはそうではないか、日本人は我々と同じ食事をつつき合って食べ、肌をつけ合って寝たではないか」というのである。ニューギニ

アには各所に白人牧師の教会があり、住民の大部はクリスチャンであるが集会の時牧師は決して住民と近く接し合う事はなかったのである。それは、身体は湿疹だらけで異様な臭いのする彼らだったからである。

我々日本人は本来的に人種的偏見がないのに加え、かれらの各種協力に常に感謝の気持ちを胸に秘めて接していた、それが彼の言葉となったり各種協力になったのであろうと思われてならない。

戦後、生き残った戦友だけで日本パプアニューギニア友好協会を作ったが、その目的の第一は彼らに何等かの感謝の行動をしようということにあったのであり、戦争中の両者の関係は戦後の遺骨収集協力になって現在も繋がっているのである。

本当に厳しい苦しい連日の我々に救いの手を差し伸べてくれたのは、間違いなく彼ら原住民なのである。

第２章　遺骨収集

Ⅰ．これまでの遺骨収集

1. 戦後間もないころの対遺族施策

昭和 25 年独立回復後の最初の国会で遺族対策が論議され、生活支援と現地慰霊を決定したが、遺骨収集は論議さえされなかった。

2. 吉田総理の実施した遺骨収集

吉田政府は昭和 27 年より 32 年迄商船学校の練習船大成丸を以て、太平洋上の 8 つの島の遺骨収集を行った。

この遺骨収集事業が誰の発案によるものか、私にははっきり判からないが、恐らく遺族関係等担当として厚生省に在籍していた美山元大佐等陸海軍将校によるものと思われる。

東部ニューギニア地区も元将校 2 名が同乗、豪政府及び現地住民の全面的協力を受け、ホルランジャ、アイタペ、ウエワク、ハンサ、マダン、フィンシハーヘン、ラエ、サラモア、ギルワ、ブナ各地から合計 4036 柱を収骨し同上各地に吉田総理の慰霊碑を建てたのである。

以上実施の間に遅留者 3 名を収容し、帰国させた。

3. 海外渡航開始による帰還戦友と遺族有志による現地慰霊

昭和 39 年政府が一般国民の海外渡航を発表すると、戦友や遺族が相継いで戦場を訪ね、現地慰霊祭を行ったり、中には各地に散乱する遺骨の一部を密かに持ち帰り、慰霊塔を建て供養する者も出てきた。同時に、各地から遺骨取集実施の要望が強く、政府や国会等に出された。

4. 昭和 40 年代初期の遺骨収集に関する政府の姿勢

政府は昭和 40 年代になり、戦友会、遺族会等が会として遺骨収集を行う場合、こ

れを政府実施とし、政府職員を同行することとした。

5. 昭和 44 年の遺骨収集

東部ニューギニアに於いては、昭和 44 年秋政府と田中兼五郎氏を団長とする東部方面戦友会による遺骨収集団を派遣した。

同時に、東部方面従軍の陸海帰国者 70 名のみで編成し、全額一般寄付により、1ヵ月間8班その他に分かれ収骨作業を行い、8800 柱を収骨した。

政府からは、職員若干名を同行させた。

6. 全国遺骨収集推進団体協議会の発足

昭和 46 年、鈴木善幸氏を会長、田中兼五郎氏を副会長とする「全国遺骨収集推進団体協議会」が発足した。

7. 政府計画による継続的な遺骨収集

東部ニューギニアの 2 回目は、昭和 48 年厚生省の計画により、団長厚生省石田課長、戦友会 40 名、遺族会 15 名、青年遺骨収集協力団 10 名、計 72 名を 8 班に分け、1 カ月に亘り遺骨収集を行い、1631 柱を収集した。

この時から所要経費の三分の一は国の負担となり、爾後全額国が負担することになった。

8. 現地事前調査制度の実施

その後、全国からの要望により、昭和 56 年から 57 年、更に 60 年からは引続いて毎年実施して東部ニューギニアは戦友が担当してきたが、途中からは東部ニューギニア、ブーゲンヒル、フィリピン、ミャンマー等は事前調査方式と変わり、

コロナで中断する迄本方式により実施して来た。但し、現地の事前調査制度採用後はニューギニアとブーゲンヒルは遺族会が落札し、その計画に基づき、戦友会1名、遺族会2名、中断前の2年前からは隊友会1名が加わり計4名で、年4回各2週間実施して来た。しかし戦友の老齢化に伴い遺児の森本・平山・横山・武藤の4名がずっと担当し、爾来名称を東部ニューギニア戦友遺族会に変更したのである。この時以来厚労省からの事前調査・現地事前調査の参加はない。

9. 平成28年「遺骨収集は政府の責任」とする法律の制定

予てから、遺骨収集は当然国の責任に於て実施すべきものであることを、国民と政治家にはっきり自覚させる為に法律の制定を要請していたが、平成28年法律が制定され、遺骨収集は政府の特に総理の責任で、厚労省に外務防衛両省が互いに協力しながら実施することとなり、実施期間は向う10年間を重点期間とすることとなった。これに伴い、実行機関として遺骨収集推進協会が設立され、爾後毎年予算額を増額して活動中である。

10. 収骨及び未収骨数

昭和29年以降の収骨総数は18,835柱で、戦争中及び戦後、密かに持ち帰った柱を合算すると、海水没の者を含め、尚7万柱が草蒸す屍となり帰国の日をお待ちなのである

11. ホルランジャ・アイタペの遺骨収集

ただ、東部ニューギニアのホルランジャ、アイタペを攻撃された時、同地には確2912たる戦闘部隊が不在、航空機を無くした約1万5千名の飛行6師団長以下

の航空部隊、約 1600 名の兵站部隊、1000 名の第 9 艦隊司令部がいたが、最高指揮官である稲田師団長は後を輸送指揮官に任せ早々に西ニューギニアに転進、航空部隊の大半とこれに続き後退、輸送司令官は一広兵站部隊の一部を以てセンタニー湖北の台上に防衛の態勢を執ったが、敵は海軍地区と兵站各部隊を一掃し、引続き台上の部隊も一掃し、一部をゲノムに突進占領させた。

兵站各部隊は一部はその儘センタニー湖北側を、大部は一応海岸地区に転じ、センタニー湖の東をアルソーにまたアイタペ及びアイタペからホルランジャ間の部隊はバユモ西の水流に沿い南下、アルソーを経てセンタニー湖の南からゲノムの北を通り西ニューギニアに向かったと思うが、現在でも状況全く不明である。

又海軍は背後の山中を西ニューギニアに向かったが地形剣難の為ホルランジャをアルソーに向かったが、その行動は全く不明である。

我々は 20 年以上前から、毎年この転進地区の現地調査の実現を強く要請して来たが、誠に残念ながら未だ実現していない。当会（東部ニューギニア戦友遺族会）には戦友は既に 1 人もおらず、遺児も 80 歳代になり、これまた残念かつ申し訳ないがこの事業への協力を隊友会にお願いせざるを得なかったのである。

本調査は長期を要しかつ今まで体験したことのない困難な事業であり、隊友会には大変なことをお願いする結果になったが、3 年間を過酷な戦況に堪え、そしてその最後を人跡無踏の森の中でさまよい続けざるを得なかったこの 1 万名以上の忠烈な戦友を、この儘放置することは、私の良心は決して許さないのである。

隊友会の皆さん、何卒この深い森林から救い出し、日本に帰国させてあげて頂き

たい。

私の心からのお願いである。

最終章　終わりにあたり

長い長い、私の東部ニューギニアの戦い等についての私の拙文をお読み頂き、ありがとうございました。

如何お感じ頂けたでしょうか？

80 年も前に行われた作戦の実態は、総ての人の脳裏から消え失せる事でしょうが、107 歳を目前にした私は今でも毎晩のように見る夢の大半はニューギニアの夢です。

やせ衰えた身体で敵と戦う様子、沢山の戦死者の様子、路傍に色々な形で死んでいる様子、見る夢の大部は戦死者の夢です。

そして目覚めて頭に残っているのは、日本に帰りたい、家族に会いたいと言う声です。

この多くの戦死者の声に応える道は、唯一つ、4 人を中心として今日まで長くこれを実施して頂いた遺児の皆さんの後を継いでくれる人を確保することです。

隊友会の皆さんには引受けて頂いていますが、隊友会に委すだけで戦死された皆様は納得されると思われますか？

今後とも東京近郊にお住いの方には森本・平山・横山・武藤各氏の跡を継ぎ、地方の皆様には遺族会推薦に応えこの崇高なボランティア活動に残りの人生を捧げて頂けませんか。又、心ある国民の皆様にもこの崇高なボランティア活動にご参加賜れば、こんなにうれしいことはありません。